HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	台湾先住民女性の帝国経験 : 出郷・婚姻・修学・還郷
Author(s)	北村, 嘉恵
Citation	境界研究, 13, 1-32
Issue Date	2023-03-31
DOI	10.14943/jbr.13.1
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/90311
Type	bulletin (article)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	02.pdf (本文)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『境界研究』No. 13(2023) pp. 001–032

[論文]

台湾先住民女性の帝国経験

―― 出郷・婚姻・修学・還郷 ――

北村 嘉恵

はじめに

言葉や文字で自らを表現し残さなかった人々の歴史経験や世界観をいかに形象化しうるか。その地点から、ある人々を不在化ないし周縁化することによって構築してきた歴史像や自他認識をいかに更新し、新たな関係性の実践へとつなげていけるか。本稿は、このような問いを抱えながら近現代の台湾先住民族の歴史経験の形象化を模索するものであり、その試みのひとつとして、ヤユツ・ベリヤ(1885頃–1932)[1]という北部台湾に生まれ育った一人の女性に焦点を据えて、その足跡を掘り起こすことを課題とする。

本稿が植民地台湾の先住民女性の個人的な歴史経験に注目するのは、先住民の集合的な歴史からは不可視化されがちな経験や主題にいかに接近するかという問題意識によるものであり、被抑圧者の中のさらなる被抑圧者、サバルタンの中のサバルタン、といった図式を前提とするものではない。むしろ、「被統治者像の再構築作業は〔中略〕『抑圧の程度』に基づく差別図式をいかにして克服しうるのかにも関わっている」[2]という洪郁如の問題提起に共感する。と同時に、帝国において公的に創り出される境界や秩序と私的に取り結ばれる関係性との交じり合いをいかに理解するかという問題関心から、植民地国家における人間の分類の実践を「親密なるもの(the intimate)」に着目して捉え直してきたアン・L・ストーラーの研究から示唆を得ている。「人種化された範疇(racialized categories)」とは「固定的であると同時に流動的、厳密であると同時に千変万化、受容されていると同時に可塑的である」[3]と捉えるストーラーの観点を参照するならば、統治の秩序の不安定さや限定性

(1) ヤユツの名のカナ表記には、ヤジ(ュ)ツ、ヤイツなどの例があるが、本稿では引用以外はヤユツと記す。

(2) 洪郁如『近代台湾女性史：日本の植民地統治と「新女性」の誕生』勁草書房、2001年、4頁。洪郁如と筆者の対談をまとめた『誰の台湾史：生きられた歴史からの問い』(早稲田大学台湾研究所、2023年、16–17頁)も参照されたい。

(3) Ann L. Stoler, *Canal Knowledge and Imperial Power: Race and the Intimate in Colonial Rule*, University of California Press, 2002, p. 8. 日本語訳も参照(アン・ローラ・ストーラー著／永渕康之ほか訳『肉体の知識と帝国の権力：人種と植民地支配における親密なるもの』以文社、2010年、12頁)。

DOI : 10.14943/jbr.13.1

とともに、範疇の可変性をめぐる力の不均衡と差響きの軽重、それゆえ生じる経験と記憶の裂け目をいかに捉えるかが問われねばならないだろう。権力の不均衡を不問にしたままで「流動性」や「多面性」、「日常性」に関心を集中させることは、〈抑圧/同化と抵抗〉といった二項対立的把握のはらむ問題の克服ではなく、むしろ現在まで継続する非対称性の追認と不可視化につながるものではないかと考える。本稿では、アプリオリに措定した帝国の重層構造のなかに被植民者／先住民／女性を配置するのではなく、また、親和的な関係と非対称な力関係を排他的なものと捉えるのでもなく、まずは個人的・集団的な経験を規定した歴史的・社会的諸条件に分け入り、個別の文脈における充足感や拘束性の錯綜とその由来を確かめていきたい。

ヤユツは、1885年頃、台湾山脈北端に位置するタイヤルmsbtunux(ムス(ブ)トンノフ)[4]の集落Qara(カラ)（竹頭角社）[5]に生まれた。台湾中部を祖地とするKButa(ブタ)一族の系譜に連なり[6]、母の名ベリヤを付したヤユツ・ベリヤとして知られる[7]。10代半ばから生地を離れて京都出身の薬剤師中野忠蔵とともに台北で生活を始めた後、20歳を過ぎて自宅近くの艋舺(まんか)公学校に通い、さらに隣接する国語学校附属女学校に進学し、10年以上にわたり漢族女児・女性に混じって就学した[8]。女学校在学中には、総督府の嘱託・雇として通訳などを担ったほか、言語学者小

(4) タイヤルは「人」という意味のtayalを自称する人びと（集団および個人）を指し、このうちmsbtunuxは大料崁渓下流域のタイヤルの自称である。一方、清および日本はタイヤルを含む先住諸民族を「番人／蕃人」「番族／蕃族」と総称し、政治的な帰服や文化的な漢俗化の程度を指標として「熟番／熟蕃」と「生番／生蕃」を区分けしようとしたほか、言語や慣習などの調査研究を通じて「種族」や「部族」の分類を重ねてきた。こうした名乗りと名付けをめぐる知（権力）の批判的検証は現在進行形の課題である。

(5) 現在の石門ダムの南東端にあたる（桃園市復興区長興村）。カラは「大きい」を意味する（19世紀末の人口規模は後述）。清朝期より竹頭角社という名称で文献に記される（社は行政上の単位）。

(6) 台北帝国大学土俗・人種学研究室による『台湾高砂族系統所属の研究』（刀江書院、1935年、18–19頁）所載の「竹東〔ママ〕角社Buta」の系図にヤユツ・ベリヤの名は見当たらないが、同一族の後裔である李慧慧の調査やヤスエ・ワタン（1933年生）の口述によれば、ヤユツは初代Butaから四代目Yumin Watanの子にあたる。また、Yumin Watanの子として記載された五代目Tanga WatanとMona Watanの名は、正確にはTanga NominとMona Nominとなる。両者はヤユツのきょうだいにあたり、ヤユツと同様に母の名を付したタンガ・ベリヤ、モナ・ベリヤとしても知られている（以上、2019年3月12、13日台湾桃園市内にて李慧慧、ヤスエ・ワタンより聞き取り）。

(7) ヤユツの家族関係については不詳な点も残るが、父ユミン・ワタンはヤユツの若年期に亡くなったようである。なお、当時の北部タイヤル社会の命名慣行によれば、本人の固有名の後ろに父または母の固有名を付すのが通例とされたが、ムス（ブ）トンノフにおいては男児に父の名、女児に母の名を付す傾向にあったほか、父の病気や離死別などを機に母の名に改めるなど幅がある。また、Yuminという名は子の名の後ろに付す際（または没後）Nominに転化する（臨時台湾旧慣調査会『蕃族調査報告書　大么族前篇』台湾日日新報社、1918年、195–196頁。台湾総督府民政部警察本署『鯨蕃語集』台湾日日新報社、1906年、10–11頁）。

(8) 20世紀転換期に台湾総督府が創設した学校制度は民族による別学制を原則とし、このうち公学校は主に漢族を対象とする初等教育機関、国語学校は公学校教員養成を基幹とする専門教育機関。ヤユツが通った公学校および女学校は、次のように改編を重ねる（表2参照）。公学校：国語学校第二附属学校（1896）、同第一附属学校（1898）、艋舺公学校（1907）、艋舺第一公学校（1919）。女学校：国語学校第一附属学校女子分教場（1897）、同第三附属学校（1898）、同第二附属学校（1902）、同附属女学校（1910）、公立女子高等普通学校（1919）、州立台北第三高等女学校（1922）。本稿では、便宜上「艋舺公学校」「附属女学校」と称する場合がある。

川尚義らとも知り合い、その調査研究に協力している。1912年には総督府主催「内地観光」に通訳として同行し、前年より病気療養のため単身帰郷していた中野との再会を果たした。京都への移住を望みつつ台北で就学を続けるなか、1915年に女学校寄宿舎で中野の訃報を受け取り、京都へ赴く。その後、新竹庁の臨時蕃語講習所[9]講師に任用が決まり、女学校を退学し、生地からやや離れた山間の集落へと活動の拠点を移した。地方庁雇として経済的自立を得ながら、警察職員の語学教育のみならず、総督府職員や内地研究者の言語調査や民族調査にも継続的に参与するなか、50歳を前にして病のため逝去した。

ヤユツ・ベリヤについてはこれまで、日本人の妻となった先住民女性という観点から注目されてきたほか、日本の植民地下で先住民女性として高い学歴と社会的地位を獲得し、植民者と自民族(タイヤル)との間で重要な役割を担った存在として光が当てられている。中西美貴[10]が「日本統治を受入れ、積極的に参与」したという側面に着目して「先覚者」と捉えるのに対して、李慧慧[11]やキルステン・L・ジオメク[12]は「仲介者」という観点から植民者への協力者という色分けには収まりきらないヤユツ像を提示しようとしている点が特徴であり、ポール・D・バークレー[13]は通訳の役割を担った人物群のなかにヤユツを位置づけ、その歴史的特徴を浮かび上がらせている。

このなかでジオメクの研究は、「サバルタンは語る」という主張を鮮明に打ち出し[14]、図像や口述資料を活用してヤユツをめぐるナラティヴやイメージの多面性を開示しながら、「境界域(liminal)」あるいは「あいだ(in between)」にある存在としてヤユツのライフヒストリーを描き出した問題提起的な試みだといえる。帝国の秩序に閉じ込められない存在としてヤユツを表象し直したいという著者の企図を通じて、植民者のステレオタイプな語りには収まりきらない浮動的なヤユツ像が確かに提示されている。ただ、ヤユツに関する複数の

(9) 地方庁警察官を対象として不定期で開催された先住民語講習の施設。1915年に開所した新竹庁の講習所は、台北庁に次いで全島で2箇所目にあたる。

(10) 中西美貴「日本人の妻となった原住民女性」台湾女性史入門編集委員会編『台湾女性史入門』人文書院、2008年。

(11) 李慧慧「教育先駆者：Yayutz Bleyh（1885–1932）」康培徳『泰雅族msbtunux的美麗與哀愁：頭角與奎輝部落KButa世系群家族史』国史館台湾文献館・行政院原住民族委員会、2009年。李慧慧「一個完美女性教育家的形構：角板山msbtunux泰雅族Yayut Blyeh的墓後故事」『桃園文献』7、2019年。

(12) Kirsten L. Ziomek, "The Possibility of Liminal Colonial Subjecthood: Yayutz Bleyh and the Search for Subaltern Histories in the Japanese Empire," *Critical Asian Studies*, 47(1), 2015. 後に、Kirsten L. Ziomek, *Lost Histories: Recovering the Lives of Japan's Colonial Peoples*, Harvard University Asia Center, 2019.

(13) 保羅・D・巴克莱／堯嘉寧訳『帝国棄民：日本在台湾「蕃界」内的統治(1874–1945)』国立台湾大学出版中心、2020年。原書(Paul D. Barclay, *Outcasts of Empire: Japan's Rule on Taiwan's "Savage Border," 1874–1945*, University of California Press, 2018)からかなり加筆された同書において、ヤユツ・ベリヤについても増補されている。

(14) ヤユツ・ベリヤに関するモノグラフを含む博士学位論文は *"Subaltern Speak"* と題されている(University of California, Santa Barbara, 2011)。

表象の間を往来する論述は、ともすれば生身のヤユツが生きた具体的状況に踏み込むことのないまま展開される。しかも、曖昧さに満ちた「境界領域」「あいだ」の“両端”には、均質なままの「日本人」「タイヤル」という範疇が再生産されているという印象を拭えない。「声なき者」とされてきた人々の声を再現しようとする企図が抱え込む困難をいかに乗りこえていくか、方法論上の絶えざるトライアルが要請されている。

本稿では、「仲介者」「境界者」としてのヤユツ像の再構築が進むなかで不問のままとなっている基礎的事実のうち、とくに婚姻、就学とその前後のプロセスに再検討を加え、同時代の北部タイヤル女性たちの経験との分岐点に留意しながら、ヤユツの経歴や存在が突出したものであった(ある)ことの意味についても考えたい(15)。

ヤユツ・ベリヤの足跡を再構築するうえで、ヤユツ自身が著述した資料はごく限られている。それでも、没後に母校の記念誌に掲載された短い回想文(16)があるほか、官製イベントの「内地観光」同行を機として帝国マスメディアの注目を集める存在となり、ヤユツの半生が語り出され、カメラも向けられるなど、同時期の先住民女性に比すればヤユツに関する文字記録や図像は相対的に分厚い。新聞雑誌に掲載されたヤユツの筆跡の写真や葉書の文面、談話の記録などは、「文明化」の成果を寿ぐ帝国マスメディアの欲望と絡まり合った形で、ヤユツの日常と非日常を垣間見せる。これら資料の断片性とともに、資料の中の不在と過剰の不均衡さが特徴である。

残された資料群に内在する偏りをいかに読み解いていくかは、歴史研究における根源的な課題だが、自ら記録を残さなかった人びとを主体とした歴史叙述を志向する研究にとって一層切実な課題である。本稿では、必ずしも十分に活用されてこなかった文字資料や写真、地図などを活用してヤユツが身を置いた具体的な空間に光を当て、彼女の行動の軌跡を掘り起こし、さらにヤユツの周辺に視線を延ばしていくこととする(17)。

(15)「自分の生を生きたにすぎない」アイヌ女性と彼女らを特別な存在たらしめる「外部の我々」との乖離に目を向ける児島恭子は、「〔知里幸恵らが〕有名になったのにはアイヌでしかも女性という、偏見にもとづいた二重の「差異」が働いている」と洞察している(「アイヌ史におけるジェンダー」『総合女性史研究』17、2000年、57頁)。

(16) ヤジユツ・ベリヤ「蕃語教授と思出の数々」(台北第三高等女学校同窓会学友会『創立満三十年記念誌』1933年。以下、三高女『満三十年記念誌』と略記)。この文章は1928年半ばの執筆と推定されるが、編者による改変の度合いは判断しがたい。同校の創立満30年(1928年10月)に向けた祝賀行事準備は同年2月に始まり、同年5月に記念誌の原稿執筆依頼を発送、9月初旬までに原稿を取り纏めて印刷に回す予定であったが、「原稿を全部修正統一する必要」から刊行自体が先送りとなり、結局、五年後に当初予定の倍に及ぶボリュームで刊行に至った。卒業生寄稿文の「整理」「校正」は同校の国語科担当教員が主に担ったという。以上、同前書539–546頁。

(17) 本稿では一部の出典を次のように略記する。『台湾日日新報』→『台日』、『福岡日日新聞』→『福日』、『日出新聞』→『日出』、『大阪毎日新聞』→『大毎』、『大阪朝日新聞』→『大朝』、『東京日日新聞』→『東日』、『東京朝日新聞』→『東朝』、『中外日報』→『中外』、『台湾総督府公文類纂』→『総督府公文類纂』。

1　カラ(竹頭角社)から台北へ

ヤユツ・ベリヤが中野忠蔵と出会い台北での生活に踏み出す経緯については、幾通りものストーリーが残されている[18]。曰く、薬草採取に山を訪れた日本青年と「蕃人」の娘が恋仲になった云々、山で「蕃人」に捕われ殺されようとした日本青年を頭目の娘が救い出して共に逃亡した云々、親の決めた結婚からの逃避行を日本青年に助けられた云々、親の許諾を得て結婚したものの嫉妬した「蕃人」らに狙われて共に逃避した云々。こうした語り口のなかに二人の関係を「際物」と捉える無遠慮な好奇心や「征服者の青年」と「酋長の娘」というコロニアル・ロマンスのステレオタイプを読み取ることは容易だ。と同時に、その渦中にあって、ヤユツ自身が聞き手の想像や期待に応える形で物語を紡ぎ出し、場の盛り上がりを楽しむような機知を発揮していたようにも見える[19]。ここではヤユツと忠蔵の恋物語が流布する過程でほぼ捨象されてきた19世紀末・大嵙崁(トアコォハム/だいかかん)という地点に視点を据えて、ヤユツが台北へ向かった時代状況を確かめておきたい。

1.1　カラに生まれ育つ

ヤユツが生まれ育ったカラ(竹頭角社)は、北部台湾最大の河川・淡水河の一支流である大嵙崁渓(現・大漢渓)が平野部に流れ出る少し手前に位置する(図1)。大嵙崁渓上流域一帯には台湾中部のピンスブカン(現在の南投県仁愛郷発祥村あたり)を祖地とする人々が移住を重ねながら集落を形成し、相互に政治的・経済的な連合や縁戚関係を結ぶとともに、山麓地域の諸集団とも交易、土地・山林資源の利用契約、武力攻防、婚姻・養子など多面的な関係を築いてきた[20]。19世紀末に清国の地方行政庁が把握していた竹頭角社の人口は

(18) ヤユツの経歴に関しては、1912年内地渡航を機として内地の大手新聞がセンセーショナルに取り上げて以降、度々報道の対象となった。相互に多くの齟齬や明らかな誤りも含まれる諸記録のうち、一定のまとまりをもったものとして以下が挙げられる。
「奇しき縁　中野氏渡台譚(一)〜(四)」『日出』1912月4月29日–5月3日
「蕃人の恋(一)〜(五)」『台日』1915年3月10日–17日
大橋随鷗「数奇の運命に翻弄されし就学者のローマンス」(三高女『満三十年記念誌』)

(19) たとえば、忠蔵の本家筋の甥にあたる中野忠八の妻万亀子は、「ヤジュッツァン」(ヤジュツさん)から聞いた話として、「日本人の男と一緒に蕃社から駈け落ちしやはったさかい、台北市内に住んではる間でも、ずうっと、阿里山へお父さんやお母さんのとこ(ろ)へ里帰りするなんてことは、いっぺんもできなんだそうや」と語り、「忠蔵の首を提げてでもないと蕃社(ムラ)へは入れてもらえません」という「ヤジュッツァン」の言葉を伝える(中野卓「タイヤル族の叔母さん:『商家同族団の研究』余話(一)」『未来』177、1981年、22頁)。阿里山の父母というくだりは聞き手(万亀子または卓)の側が国定教科書にも掲載された呉鳳伝説と混同した可能性もありうるが、「首狩り」という「生蕃」のステレオイメージに載せて、女性には許されないタイヤルのしきたりをデフォルメしつつ身上を語るヤユツの姿が仄見えるようにも思われる。ただ、故郷との距離をめぐるヤユツの内面や具体的な関係性について立ち入って論じることは、現在の筆者には難しい。

(20) 家族史の観点からKButaという一族に焦点を据えて竹頭角社および隣接するケイフイ社の歴史をたどった康培徳『泰雅族msbtunux的美麗與哀愁』は、漢族との養子縁組や婚姻関係が同一族に及ぼした影響にも注目している。

図1　北部台湾略図(1900年頃)

出典：筆者作成

男163名・女172名であり、カラ(＝大きい)という名を具現するように、大嵙崁渓一帯で最大規模のタイヤル集落であった[21]。

ヤユツが生まれたのは、清国と西欧列強との間の摩擦が拡大し、その波動が大嵙崁地域にも及ぶ時期にあたる(年表参照)[22]。アロー戦争(1856–60)を通じて滬尾(ホーボッエ/こび)(淡水)や鷄籠(ケェラン/けいらん)(基隆)が開港され、北部台湾の茶や樟脳(しょうのう)[23]の輸出量が急速に伸びるなか、生産地および水運拠点として重要性の高まった大嵙崁には、華商や洋商が商館を構え、島内の労働者が流入してきた。さらに日本による台湾派兵(1874)や清仏戦争(1884–85)の衝撃のもとで海防策の一環として台湾統治体制の改革が進められ、軍営や撫墾(ぶこん)局(山地開墾と先住民制禦の所管庁)、脳務(のうむ)局(樟脳生産の所管庁)など軍事的・政治的・経済的な拠点が山地内部にも及びはじめた。

図2は、日清戦争終結後、台湾島内で生起した「郷土防衛戦争」のさなかに、島内産業の状況把握を急ぐ新植民地政府が蒐集した大嵙崁地方の地図である[24]。同地で樟脳製造業に

(21)「撫墾局状況台北県報告」(『明治二十八年総督府公文類纂』第二十四巻、V35/A6)。同資料には、大嵙崁市街地から東南方約110㎞に及ぶ約70集落ごとに「土目」の漢字表記名や男女別人口が列記されている(総計男2,938名、女3,423名)。

(22) ヤユツ逝去の翌秋に建立された墓碑の背面には「明治十八年十二月十日竹頭角社ニ生ル」と刻まれているが、ヤユツの生涯を略述した同碑文中には他の公的記録との齟齬も少なからずあり、ここでは清仏戦争後の時期に幼少期を過ごしたことを確認しておきたい。

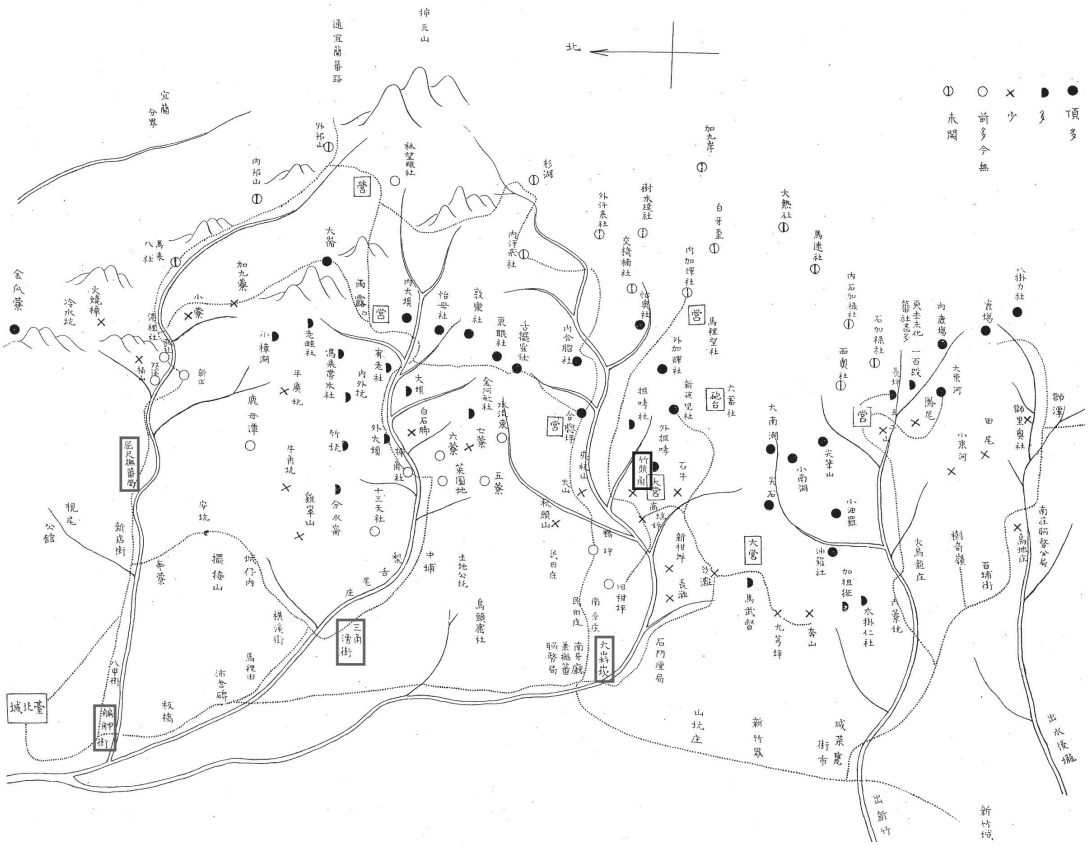
(23) クスノキの材片から精製される樟脳は、香料、防虫剤、医薬品のほか、セルロイドや火薬の製造原料として広く利用され、19世紀後半には台湾の主要な輸出品であった。

(24) 台湾総督府民政局殖産部編『台湾産業調査録』1896年。

関連年表

年	ヤユツ・ベリヤ関係事項	中野忠蔵関係事項	関連事項
		1873.12 京都市下京区に生る	1884清仏戦争
1885	この頃、竹頭角山カラに生る		天津条約，台湾省設置,樟脳局創設
1886			大嵙崁撫墾局開設，官制隘勇配置，台北城内の番学堂に大嵙崁等より
1890		4.京都私立独逸学校薬学科入学（1892薬学科廃止、京都薬学校設立）	この頃，大嵙崁に魯麟洋行(英),公泰洋行(独)，瑞記洋行(西)など支店設置
1893		4.京都薬学校卒業，7.京都府立療病院調剤生補(月俸6円)	
1894		6.薬剤師開業試験合格，7.京都府立療病院調剤生(月俸8)	日清戦争
1895		10.依願免官，滋賀医院薬局嘱託	4.下関条約，6.台湾総督府始政式，10.「官有林野取締規則」
1896		10.滋賀医院薬局辞職，基隆隧道工事工夫療病所嘱託(大倉組)，11.台北第二避病院嘱託(月手当45)	9.「蕃地ニ出入スル者取締方」
1897		2.台北第二避病院解職，7.嘉義療病院嘱託	8.大西商行大嵙崁にて製脳事業許開始
1898		6.嘉義療病院辞職，8-11.香港滞在	
1899	この頃、中野忠蔵と出会う*	7.台北避病院解職，大嵙崁辨務署管内居住(大西商行)，この頃、ヤユツと出会う*	6.樟脳専売制施行
1900	この頃、台北へ出る* 中野忠蔵と同居？	8.大嵙崁封鎖により台北へ戻る ヤユツと同居？	大嵙崁事件，8.大西商行撤退
1901		6.台北西門街に薬局開設	
1902		4.台北文武街に支局開設，6.薬局・支局廃業，台北避病院雇(月俸33)	
1904		5.艋舺婦人病院嘱託(月手当5)	
1905*	国語学校第一附属学校入学*(聴講生)		
1908		(台北城南医院雇(月俸40))	国語学校第二附属学校：士林から艋舺へ移転(1910附属女学校と改称)
1909			10.台湾総督府蕃務本署設置
1910			「五箇年計画理蕃事業」(-14)
1911	艋舺公学校修了*，附属女学校技芸科入学*，8.祖師廟の学寮へ入寮，10.総督府嘱託(蕃務本署)(月手当3円)	8.転地療養のため単身で帰京	
1912	4-5.内地観光団に随行通訳，8-10.内地観光活動写真通訳(台北，新竹，台中)	4.27神戸港にヤユツを出迎え，5.18京都駅まで見送り(忠蔵の姉ミツ同行)	
1913	4.京都行き総督府不許可，6.総督府雇(蕃務本署)，7.忠蔵危篤の電報をうけ京都へ，8*.帰台		3.「臨時蕃語講習所規程」
1914			8.「蕃地平定」奉告祭(於台湾神社)
1915	3.女学校主事より訃報伝達,*.女学校退学，4.京都へ服喪，9.総督府雇解職，新竹庁雇，内横屏山蕃語講習所講師(月俸15)	3.6 没	7.蕃務本署廃止，警察本署理蕃課設置 9.「内横屏山蕃語講習所」開設
1916			7.「内横屏山蕃人療養所」開設
1917			11.「内横屏山蕃童教育所」開設
1918	4-5.内地観光団に随行通訳，5.洛東大谷別院へ墓参(忠蔵の父同行)	5.11 中野忠兵衛(忠蔵の父)ヤユツに同行墓参	台湾総督府蕃族調査会発足(-22)
1920	新竹州雇(竹東郡役所警務課)		『蕃族調査報告書 大么族後篇』(蕃族調査会)
1926	新竹州蕃語講習所移転に伴いシパジー社へ転住(月俸62)		シパジー蕃語講習所開設(内横屏山より移転)
	*養子を引き受ける		
1930		中野忠二郎(忠蔵の縁戚)航空母艦加賀にて基隆入港，角板山貴賓館泊	
1931			『タイヤル語典』(新竹州警察文庫)，『アタヤル語集』(台湾総督府)
1932	3.20没		
1933	竹頭角に墓碑建立		

主な典拠:『台湾総督府公文類纂』『台湾日日新報』『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』『東京朝日新聞』『東京日日新聞』『日出新聞』『福岡日日新聞』『中外日報』『台湾警察協会雑誌』『台湾総督府職員録』『台湾総督府警察職員録』ほか。


北
頂多
多
少
前多今無
未開
大嵙崁
三角湧街
大嵙崁庄
城北臺
城北臺街
大南湖
大熱社
馬武督
大營
砲台
六番社
馬武督社
九号坪
番山
加祖振社
衣林仁社
大茅埔社
大茅埔
小南湖
小茅山
小西湖
南庄
南庄番
南庄番社
獅里奥社
獅潭
獅潭庄
樹杞林
百埔街
大鳥龍庄
大鳥龍社
南庄番社
出水坑
出水坑庄
新竹縣
出新竹
城茶園
街市
新竹縣
山坑庄
新竹縣
馬武督
九号坪
番山
加祖振社
衣林仁社
大茅埔社
大茅埔
小南湖
小茅山
小西湖
南庄
南庄番
南庄番社
獅里奥社
獅潭
獅潭庄
樹杞林
百埔街
大鳥龍庄
大鳥龍社
南庄番社
出水坑
出水坑庄
新竹縣
出新竹
城茶園
街市
新竹縣
山坑庄
新竹縣
大熱社
馬進社
內石加祿社
石加祿社
西湖社
內產場
大茅河
小東河
田尾
獅尾
八掛力社
產場
獅潭
獅里奥社
南庄番社
大南湖
小南湖
小茅山
小西湖
加祖振社
衣林仁社
大茅埔社
大茅埔
樹杞林
百埔街
大鳥龍庄
大鳥龍社
南庄番社
出水坑
出水坑庄
新竹縣
出新竹
城茶園
街市
新竹縣
山坑庄
新竹縣
加九岸
白岩重
內加祿社
馬羅望社
外加祿社
新城兒社
六番社
砲台
大營
馬武督
九号坪
番山
加祖振社
衣林仁社
大茅埔社
大茅埔
樹杞林
百埔街
大鳥龍庄
大鳥龍社
南庄番社
出水坑
出水坑庄
新竹縣
出新竹
城茶園
街市
新竹縣
山坑庄
新竹縣
樹水坡社
外汗素社
內汗素社
杉湖
內汗素社
致東社
泉眼社
千滿寶社
山谷脚社
外脚社
外根時
根時社
石牛
新祖坪
長流
沙灘
旧祖坪
南多坑
南多坑庄
蕉園蕃
明發局
民田庄
鳥龍麓社
土地公坑
杉園山
鶴坪
大山
大營
大茅埔
大茅埔庄
六番
五番
六番
葉園坑
水流坑
金山社
金山
大營
大茅埔
大茅埔庄
大茅埔社
大營
大坪
白石脚
大坪
致東社
怡安社
吶大坪
大營
兩霧
大崙
加九寮
小寮
八社
馬東
湖裡社
冷水坑
火燒橋
金瓜寮
內外坑
外大坪
十三天社
中埔
古亭
舊社
土地公坑
內外坑
竹坑
牛角坑
鹿母潭
小橋湖
念畦社
馮義帶水社
內外坑
分水崙
鐵軍山
牛角坑
亭坑
擺橋山
城仔內
橫溪街
馬裡田
術金硐
坂橋
新庄街
新庄
視尾
公館
新庄街
泰安
臺灣北部蕃地
臺灣北部蕃地
三角湧街
大嵙崁庄
大嵙崁庄
臺灣北部蕃地
臺灣北部蕃地
臺灣北部蕃地

のと推測される。

一方、山麓の市街地には行政庁(図中では南牙(なんが)庁)・撫墾局(図中では撫蕃局)・脳務局が設置され、台北城および新竹城が水陸路で結ばれている。竹頭角社(カラ)から大嵙崁市街までは川沿いに約40キロメートル下った距離にあり、そこから北台湾の物産集散地である台北・艋舺(バンカア/まんか)までは小舟で下り半日、上り三日ほどの道程であった。また、近年の黄富三の研究によれば、遅くとも1891年には基隆—台北—新竹間の鉄道が開通しており、大稲埕(トアティィウティィア/だいとうてい)(台北)—桃仔園(トォアアフン/とうしえん)(桃園)間を毎日三往復する貨車が「大嵙崁の役」(1891–92)における林朝棟側の兵站の要となったという[27]。軍事的・政治的衝突が継続するなか、処罰ないし人質として市街の官署に留め置かれるタイヤル男女がいた一方[28]、清朝に服すこととなった人びとの中には、大嵙崁市街地に居を構える者や[29]、台北城内に開設された「番学堂」で北京官話などを学ぶ者[30]、台北大龍峒(トァロントン/だいりゅうどう)の伝道者の養女となる者[31]など、外来者たちと新たな接点を結ぶ動きも認められる。

押し寄せる波動のなかで幼少期を過ごしたヤユツが10代半ばを迎える頃、大嵙崁では新たな植民地政府のもとで開墾や製脳の権限が華商・洋商から日本の事業家へ移り、後に同地居住の内地人が「大嵙崁の黄金時代」[32]と回顧するような景況が現出していた。この樟脳景気に湧く大嵙崁へと向かった内地移民の波のなかに、中野忠蔵がいた。

(27) 黄富三「清季台湾大嵙崁之役中棟軍支応処的運作(1891–92)」『台湾風物』69:4、2018年。

(28) たとえば、カナダ長老教会宣教師ジョージ・L・マッケイの日記(1891年7月7日条)には、大嵙崁地方伝道の際、鎖につながれた約20名の先住民男女に遭遇した様が記されている(『The Diary of George Leslie Mackay, 1871–1901 馬偕日記』中央研究院台湾史研究所ほか、2015年、442頁)。

(29)「撫墾局状況台北県報告」(『明治二十八年総督府公文類纂』第二十四巻、V35/ A 6)。平地への移住や往来は軍事的な緊張の緩急により変動し、1895年7月20日付の同報告書には、一時60余戸にのぼった大嵙崁への移住者が「現時ハ復タ逃テ内山ニ帰リ旧ニ仍テ生蕃ト一群タリシナラン」と記されている。

(30) 台北番学堂は、巡撫劉銘傳の台湾在任最晩期にあたる1890年に台北に開設し、翌91年に劉の離任に伴い閉鎖。大嵙崁・屈尺出身の生徒のうち、閉鎖後も台北に留まったプーチン(蒲靖)や、シロン(詩朗)、イバン・ブルナ(呉金達)などの名が知られており、日本統治初期には軍官の通訳などの役割を担い、伊能嘉矩らの学術調査にも協力している(伊能嘉矩『台湾蕃政志』台湾総督府民政部殖産局、1904年等)。

(31) 大嵙崁キムナジイ社頭目ピラ・オミンの娘アイ(1880年頃生)は、幼時(8歳頃)に人質として大嵙崁撫墾局に留め置かれ、12歳頃にカナダ長老教会の伝道者陳存心に贖われて養女として台北生活を始めた後、1896年初頭より伊能嘉矩の居宅で語学学習や調査研究に尽力し高い期待を寄せられるなか、翌97年に病没(伊能嘉矩「大嵙崁(Toa ko ham)の蕃婦」『東京人類学雑誌』120、1896年3月、同「生蕃婦アイを悼む」『東京人類学雑誌』138、1897年9月)。陳存心は、北部台湾最初の長老教会礼拝堂である大龍峒教会の設立(1875年、のち大稲埕教会)に尽力した陳願・李環夫妻の息子にあたり、宣教師マッケイの学生として1877年から淡水に学び、1890年代には大嵙崁地方への伝道にも派遣されている(頼永祥「陳願和大龍峒設教」『台湾教会公報』2214、1994年、同「馬偕在桃園的脚蹤」『台湾教会公報』2593、2001年)。

(32)『大溪誌』大溪郡役所、1944年、139–140頁。

1.2　大嵙崁へ向かう

1873年に京都の薬種卸小売商の次男として生まれた忠蔵は、京都薬学校を卒業して薬剤師開業免状を得た後、京都や滋賀の医院勤務を経て、日清戦争勝利の翌1896年に台湾へ渡った[33]。港町基隆で大倉土木組の隧道工事工夫療病所に足がかりを得た後、避病院(伝染病患者の隔離収容施設)での調剤事務やコレラ対策などに従事しながら台北、嘉義、香港などを転々と渡り歩き、1899年夏、製脳事業に沸く大嵙崁へと向かった[34]。後年の新聞記事によれば、「大西某」から「誰か大嵙崁へ行く医師」を求めていると相談を受けて自ら応じることにしたという[35]。折しも同年6月に台湾総督府が樟脳専売制を施行し、大嵙崁地方では大東、有川、大西、小松の四者が製脳事業認可を獲得した時期にあたる[36]。一方、調剤手として半年間ほど勤務していた台北避病院については、「無届外出職務ニ従事セス調剤事務ニ差支不少」[37]との理由をもって1899年7月末に解職となっている。島都の県立病院にまさる大嵙崁の製脳事業の吸引力とともに、新たなチャンスを求めて短期間で転職・転地を重ねる青年男性移民の横顔が窺われよう。

複数残されている忠蔵の履歴書のひとつには、1899年8月から「樟脳製造及森林原野産物製造技術研究ノ目的ヲ以テ元大嵙崁弁務署管内蕃地在住」[38]と記されているが、「蕃地在住」という記載の裏付けを得ることは難しい[39]。試みに、地方行政実務を担った弁務署の報告書をもとに、1899年後半期の大嵙崁地方における「入山許可」の記録を整理したのが表1である[40]。この時期に入山者の大半を占めたのは、製脳業者に雇われた職工や警備員であり、彼らは山中の作業小屋(脳寮(のうりょう))や警備小屋(隘寮(あいりょう))に起居した。医師という身分での入

(33)「中野忠蔵台北避難病院調剤手ニ採用ノ件」(『明治三十一年台北県公文類纂』第二十九巻、V9284/A31)。中野忠蔵の生家に関しては、忠蔵の本家筋の親戚にあたる中野卓および中野万亀子による以下の文献を主に参照。中野卓「タイヤル族の叔母さん」、中野卓『商家同族団の研究:暖簾をめぐる家と家連合の研究　下』(未来社、1981年)、中野万亀子著／中野卓編『明治四十三年京都:ある商家の若妻の日記』(新曜社、1981年)。

(34)「雇石橋剛外一名増俸認可ノ件(台北庁)」(『明治三十九年総督府公文類纂』第十七巻、V1256/A23)、「奇しき縁(一)　中野氏渡台譚」(『日出』1912年4月29日)。

(35)「奇しき縁(二)　中野氏渡台譚」『日出』1912年5月1日。同記事は、ヤユツの最初の京都来訪時に、地元新聞が中野忠蔵の談話をもとに連載したものである。

(36)「大嵙崁通信」『台日』1899年9月9日。

(37) 台北避病院長名による台北県伝染病予防本部長宛上申書(1900年7月28日付)によれば、無断欠勤は7月19日から3週間近く続いたようである(「台北避病院調剤手中野忠蔵解職ノ件」)。なお、職位は調剤手(台北県警察部衛生課兼勤)、当初の月手当は35円であった。

(38)「雇石橋剛外一名増俸認可ノ件(台北庁)」。

(39)「蕃地」と通称された先住民居住地域は、一般の行政区域とは区別され、同地域への往来には官庁の認可が必要であった(「蕃地ニ出入スル者取締方」1896年9月府令第30号、台湾総督府民政部文書課編『台湾総督府法規提要』1901年)。

(40) 本表には軍隊や総督府官吏、警察吏員は含まれていない。一方、家族や友人との面会のための入山者(8月24、29日)は、同年春より屈尺在住の事業家土倉龍次郎が官許を得たうえで養育していたタイヤル少年であり、その一時帰宅も入山管理の対象であった。

表1　台北県三角湧弁務署における入山許可の概況（1899年6月～11月）

入山月日	在山日数	入山者、入山目的	人数
6月2日	1	臨時糧食運搬	30
6月6日	0	「防蕃夫」として居住	6
同日	0	脳丁（製脳職工として居住）	30
6月9日	0	脳丁（製脳職工として居住）	61
6月10日	2	代議士（視察）	1
6月12日	0	脳丁（製脳職工として居住）	7
6月19日	0	脳丁（製脳職工として居住）	90
7月15日	0	脳丁（製脳職工として居住）	25
8月1日	0	脳丁（製脳職工として居住）	31
8月7日	0	脳丁（同上）	1
8月14日	7	医師（患者診療）	2
8月18日	7	友人に面会	1
同日	5	兄に面会	1
8月21日	0	脳丁（製脳職工として居住）	10
8月23日	0	医師（患者診療）	1
8月24日	0	友人に面会	1
8月28日	5	小使として居住	1
8月29日	6	兄に面会	1
同日	6	面会者に同行	1
9月中	-	（詳細不明）	16
10月中	-	（詳細不明、人数は製脳業者を除く）	21
11月中	-	（詳細不明、人数は製脳業者を除く）	11

出典：「三十二年六月中新竹外三弁務署蕃人蕃地ニ関スル事務及情況報告」（V4595/A4）、「三十二年七月中新竹外二弁務署蕃人蕃地ニ関スル事務及情況報告」（V4595/A5）、「三十二年八月中新竹外二弁務署蕃人蕃地ニ関スル事務及情況報告」（V4595/6）、以上いずれも『明治三十二年台湾総督府公文類纂　十五年保存追加　第二巻』所収。「明治三十二年九月中蕃人蕃地ニ関スル事務及情況台北県報告」（V4622/A2）、「明治三十二年十月中蕃人蕃地ニ関スル事務及情況台北県報告」（V4622/A3）、「明治三十二年十一月中蕃人蕃地ニ関スル事務及情況台北県報告」（V4622/A4）、以上いずれも『明治三十三年台湾総督府公文類纂　十五年保存追加　第三巻』所収。

山者は、製脳業者が従業員のために派遣した巡回診療の類と推察されるが、もしこの中に忠蔵が含まれていたとすれば、その生活拠点は市街地であったろう。

一方、弁務署の報告書には、管内先住民の下山に関する記録も含まれる。とりわけ弁務署を訪れた者については入山許可者の記録よりも詳細にわたることが多く、時に数百名に及ぶ来署者すべての名前や性別、時には推定年齢が記されている。往来する人びとの層の広がりを示すこれらの記録のうち、1899年1月26日に竹頭角社から三角湧弁務署を訪れた男18名・女12名の中に「ヤジュツピリヤ」という名が見える(41)。断定はしきれないにしても、ヤユツが市街地に赴く機会も閉じられてはいなかったといえる。

後年に流布したストーリーでは、ヤユツの同族の男たちが中野に差し向けた反感や攻撃

(41)「三十二年一月中景尾外二弁務署蕃人蕃地ニ関スル事務及情況報告」（『明治三十二年総督府公文類纂』第一巻、V4594/A7）。

がことさら強調され、野蛮から文明への脱出として愛の逃避行が脚色される傾向が強い。だが、言語や慣習の異なる社会集団から配偶者や養子を迎え、あるいは娘や息子を送り出すことは、北部タイヤル社会において必ずしも忌避されたわけではなかったし、交易上の便益や政治的な見地から異族との間に縁戚関係を結ぶケースは珍しくはなかった(42)。集団的な婚姻戦略の慣行のなかで、親同士ないし男同士が合意を主導することが通例であったが、重要なことは共食の儀式を通じて婚姻関係が共同体に認められることであり、親の取り決めに違背する関係が結ばれた場合にも(単身者同士であれば)当人たちが共同体に対する責を果たすことで容認されうるものであったという(43)。

19世紀末大嵙崁の山麓におけるヤユツ・ベリヤと中野忠蔵の遭遇は、こうしたタイヤル社会の秩序や対外交渉の積み重ねの上に、日本による植民地経営の波がぶつかる地点に生起し、忠蔵が大嵙崁を離れる契機もまたそのなかで醸成された。ヤユツと忠蔵の関係について顛末を確定することは困難だが、台北へと踏み出したヤユツの行動の先に、忠蔵が大嵙崁での職を断念して台北へ戻る事態が重なった点に、同時代の女性たちとの大きな相異があったように思われる(44)。

これまでにない規模で入山者が増加し製脳・開墾が進むなかで、土地利用の条件をめぐる齟齬や樟脳運搬など賃労働をめぐる軋轢、伝統的・日常的な禁忌の踏みにじりなどが幾重にも重なりあい、外来者に対する不信と憤りが武力衝突として顕在化する(45)。総督府は隘勇線と称する武装ラインをもって先住民居住地を包囲し、高電圧鉄条網や地雷を敷設して防御を図りつつ、軍隊・警察を投入して段階的に制圧を進めようとするが、こうした動向が一層タイヤルの間の緊張を高めることにもなった。隘勇線(46)の拡張、軍隊・警察隊の投入、その敗退といった事態が連鎖するなか、同年8月末には全面的な入山禁止に立ち至り、管内の製脳事業は頓挫するに至る。これは「従来生計ヲ蕃地ノ事業ニ仰キシ者」(47)たちをも直撃した。忠蔵がわずか一年で再び台北へ戻るのはこの時期にあたる。

(42) 保羅・D・巴克萊『帝国棄民』、林淑美『清代台湾移住民社会の研究』(汲古書院、2017年)等を参照。

(43) 臨時台湾旧慣調査会『蕃族調査報告書　大么族前篇』、森丑之助『台湾蕃族志』臨時台湾旧慣調査会、1917年等。

(44) ヤユツが顔見知りとなっていた忠蔵の助力を得て単独で台北に出たとの経緯を伝える記録として、大橋随鷗「数奇の運命に翻弄されし就学者のローマンス」がある。なお、タイヤル女性と内地人男性が関係を結んだことを示唆する記録は少なくないが、経緯や当人たちの行動はそれぞれ異なること、男性側に関係継続の意志がない場合に女性はタイヤル社会内部でも厳しい状況に追い込まれ失踪や自死、被殺に至る場合もあったことに意を留めておきたい。

(45)「三角湧弁務署長蕃害ニ関スル情況臨時報告」『明治三十二年総督府公文類纂』第三十巻、V 398/A1ほか。

(46) 隘勇と称する武装警備員を配置した警備ラインであり、隘路と称する警備路、隘寮と称する警備小屋、隘寮を結ぶ鉄条網(一部通電)や電話線、地雷、砲台などから構成される。隘勇は警察機構の末端組織として編制され、先住民に対する武力攻撃の前線を担った。

(47)「台北、台中、台南、宜蘭、台東ノ三県二庁九月分蕃人蕃地ニ関スル事務情況報告」『明治三十四年総督府公文類纂』第十五巻、V 4647/A3ほか。

2　台北での寄留生活

2.1　艋舺の公学校・女学校とその周辺

ヤユツの公学校および女学校への入学は、いかなる経緯で実現したのだろうか。ヤユツの「高い学歴」を強調する既往の研究では、学歴の内実について十分な関心が払われないままに、内地人との結婚、公学校・女学校就学、蕃語講習所講師という経歴が社会的上昇過程として直線的に捉えられてきた。だが、同時代の断片的な史料に即してヤユツの足跡をたどるとき、やや異なる局面が浮かび上がってくる。

まず確かめておくべきは、国語学校第一附属学校(艋舺公学校)および附属女学校の卒業生名簿にヤユツの名は見当たらず(48)、女学校同窓会の名簿には「半途退学者ニシテ会長ノ承認ヲ経タル者」(49)の一人として名を連ねていることだ。元女学校教諭の回想によれば、ヤユツは1905年4月より国語学校第一附属学校(1907年艋舺公学校に改編)に「傍聴生」として入学し、第1学年から第6学年まで修めた後、1911年4月に同敷地内の国語学校附属女学校に「転じ」、1915年「修業」にあたり「特に或学科を限つた学修証書」が付与されたという(50)。これに従えば、ヤユツは正規生徒の学籍を有しないまま規定の修業年限(女学校3ヶ年)を超過して就学を継続したことになる。「学歴」としては「技半退」(51)、すなわち技芸科・半途退学という位置づけになるようだ。

些末ともみえる学籍や学歴の扱いにこだわるのは、ヤユツの経歴の「不完全さ」を示すためではない。むしろ、先住民の若者たちが植民地学校制度の枠内で学ぶ形態とその意味を考えるうえで瑣事ではないと考えるからだ。「蕃人」「本島人」「内地人」という分類による別学制の原則に照らせば、そもそもヤユツは附属学校入学者の対象外だ(52)。そのような学

(48) 台湾総督府国語学校『台湾総督府国語学校一覧 自大正六年至大正七年』1917年、三高女『満三十年記念誌』、『台北市万華区老松国民小学 百一十週年校慶専刊：老松展新意・舞動心世紀』2006年。

(49) 三高女『満三十年記念誌』574頁。同窓会会則によれば会長には母校長が据えられた。なお、さらに後年の同窓会名簿によれば、「大正十四年技芸科第九回卒業生」の「同期転退学者」の一人としてヤジツベリヤの名が見える(台北第三高等女学校同窓会『昭和十五年九月一日現在　会員名簿』34頁)。

(50) 大橋随鷗「数奇の運命に翻弄されし就学者のローマンス」、443–444頁。大橋捨三郎(随鷗)の附属女学校勤務は1901年3月–1926年8月の長期にわたる。

(51) 三高女『満三十年記念誌』437頁。

(52) 当該時期の入学資格に関する規定は次の通り。「本島人」(漢族系の台湾島民)を対象とする第一附属学校(艋舺公学校の前身)の入学資格は「満七歳以上満十二歳以下」を原則とし、「特別ノ事情」がある場合には庁長の認可を経て12歳超過者の入学が許可された。附属女学校技芸科の場合は、「年齢満十三歳以上二十五歳以下」の「公学校第四学年ノ課程ヲ修了シタル者又ハ之ト同等以上ノ学力ヲ有スル者」が入学対象である。原則的には埒外だが、地方庁や総督府の裁量に依り正規の入学許可の余地はあったとも読める。(「台湾総督府国語学校規則」(1902年7月、府令第52号)、「台湾総督府国語学校第一附属学校規程ハ台湾公学校規則ニ準拠之件」(1898年8月、府令84号)、「台湾総督府国語学校第一附属学校規程」(1904年8月、府令第5号)、「台湾総督府国語学校附属女学校規程」(1906年4月、府令第25号)。以上、台湾総督府民政部総務局学務課『台湾総督府学事法規』1902年、台湾教育会『台湾学事法規』1913年)。

校制度に参入していく過程でどのように差異をめぐる力学が働くのか、ヤユツの足跡を辿りながら探ってみたい。

中野忠蔵の履歴書や総督府の職員録などによれば、忠蔵は1900年夏に台北へ戻り旧城内で薬局を1年ほど開業した後、再び台北避病院(1907年城南病院と改称)雇に採用され、艋舺婦人病院嘱託を兼務しつつ、旧城外の艋舺・八甲街に生活の拠点を置いていたことが確認できる(53)。薬学校卒業以来2年以上勤続するのはこれが最初である。この間、ヤユツの生活拠点も艋舺に据えられたと推定され、忠蔵が病気療養のため単身帰郷(1911年夏)したのを機に、女学校寄宿舎(祖師廟)へ居を移すこととなる(54)。

以上の軌跡を地図上でたどってみると、ヤユツの住居と第一附属学校女子分教室(龍山寺)は至近距離であり、ヤユツが附属女学校に通い始めるのは、移転を重ねてきた艋舺公学校と附属女学校が八甲街の隣接地に落着した時期に相前後することに気づく(55)(図3・表2参照)。淡水河右岸に龍山寺と祖師廟を核として形成されてきた艋舺は、官庁や日本人居宅が集まる旧城内とは異なり、漢族系住民を主体とする繁華な地域であった。漢族の中上流家庭の女性が外出すること自体が珍しかった当時、女学生の朝夕の通学時には近隣の住民が物珍しげに集まったという(56)。もとよりヤユツの入学との因果関係を短絡することはできないにしても、「時々、女学生を道で見ますと、なほなほ女学校に入りたいやうな気がしてたまりませんでした」(57)という回想に凝集されたヤユツの日常のリアリティに接近する一助にはなろう。

ヤユツの就学が総督府ないし忠蔵の意向によるという既往の議論を裏付けるような痕跡は、管見の限り見出せない。台北生活を5年ほど経て20歳を過ぎた後に近在の公学校に就学したヤユツの経歴は、当局に選抜された先住民児童が幼年時に故郷から引き離されて小学校=内地人集団の中に入れられたことに照らせば異色である。ヤユツの回想記によれば、公学校で教員たちから女学校は「なかなかよいぞ」と度々聞き、総督府で理蕃課長から「大に勧められ」るなかで、女学校入学を「心から決心」するに至ったという(58)。これらが示唆するのは、他者の主導性というよりも、当人の意志と躊躇と行動力であろう。そして、

(53)「雇石橋剛外一名増俸認可ノ件(台北庁)」、『台湾総督府職員録』(各年度)。後者によれば、両院での勤務が確認できるのは1908年度までである。なお、艋舺婦人病院は、娼妓身体検査所と娼妓治療所を合併した台北庁駆黴院を前身とする庁立施設で、1904年に艋舺八甲庄の台北避病院跡地へ移転。

(54) 大橋随鷗「数奇の運命に翻弄されし就学者のローマンス」、444頁。同文章中の「新富町の自宅から通学」との記述をもとに新旧行政区画を対照すると、新富町と八甲街とは若干のズレがあるが、いずれも艋舺公学校の隣接地である。

(55) 1908年に台北郊外の士林から市街の艋舺へ移転した国語学校第二附属学校(のち附属女学校)は、新築まもない艋舺公学校に校舎を間借りし、寄宿舎は艋舺公学校が使用していた祖師廟を用いることとなった。

(56) 洪郁如『近代台湾女性史』、115頁。

(57) ヤジユツ・ベリヤ「蕃語教授と思出の数々」、438頁。

(58) ヤジユツ・ベリヤ「蕃語教授と思出の数々」、438頁。

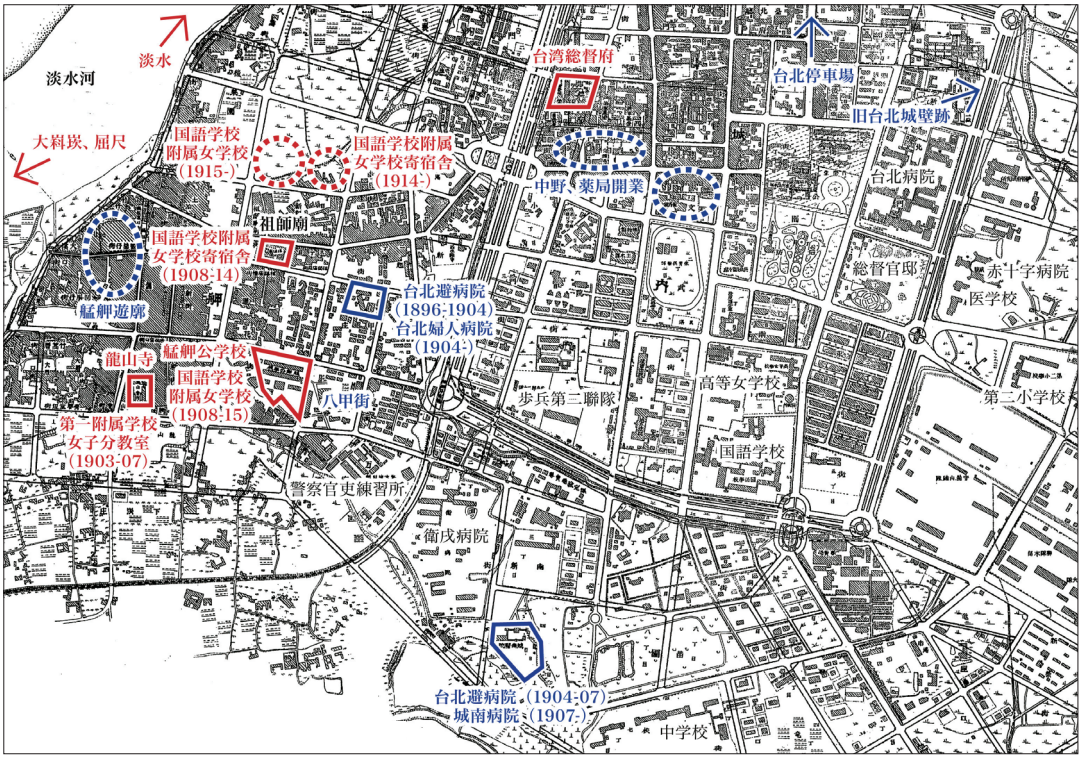


図３　20世紀初頭の台北・艋舺市街と中野忠蔵の勤務地・居所

出典：台湾総督府土木部「台北市区改正図」（1910年１月現在」）をもとに筆者作成。

表２　「艋舺公学校」「附属女学校」の名称・位置の沿革概略

	「艋舺公学校」	「附属女学校」	中野忠蔵の居所/勤務先
1896	国語学校第二附属学校(艋舺)		滋賀，基隆，台北
1897		国語学校第一附属学校女子分教場(八芝蘭)	台北，嘉義
1898	国語学校第一附属学校(艋舺)	国語学校第三附属学校(八芝蘭)	嘉義，香港，台北
1899			大嵙崁
1900			台北
1901			台北(西門街)
1902		国語学校第二附属学校(八芝蘭)	台北(文武街)，台北避病院
1903	＊女子分教室分離(龍山寺)		台北(八甲街)
1906		＊技芸科設置，本科廃止	
1907	艋舺公学校(女子分教室合併，新築)	＊初めて全島より技芸科生徒募集	
1908		＊艋舺へ移転(艋舺公学校校舎を共用)	城南病院，艋舺婦人病院
1910		国語学校附属女学校(師範科,技芸科)	
1911			京都
1914		＊寄宿舎新築移転(艋舺)	
1915		＊校舎新築移転(艋舺)	没
1919	艋舺第一公学校	公立女子高等普通学校(技芸科廃止)	
1922		州立台北第三高等女学校	

忠蔵がそれを妨げなかったこと、二人の間に子がなく親たちとも離れていたこと、忠蔵の定職や投資によって経済的な安定を得ていたこと、など複数の条件の重なりに留意する必要がある。加えて、総督府の導入した学校への入学希望者が定員を超えるほど集まらない時期であったことも、ヤユツの希望が閉ざされなかった遠因に数えられよう。

以下に掲げる新聞記事は、女学校に学ぶヤユツの姿を窺わせる最も初期の資料である(59)。

> 生徒の種別　勿論本島女子が其の大部分を占めつゝありと雖も此中熟蕃一名及英国或は清国に籍を置く者三名を含むは奇なり殊に熟蕃女の海老茶袴に束髪姿にて熱心に技芸を励みつつあるが如きは唯々参観者をして其動作の殊勝に驚かしむ可し而して是等の生徒は娘七十四、媳婦仔十六、有夫七の割合にて合計九十七名に達す

出自や年齢など幅のある生徒集団のなかで、ヤユツとおぼしき女性は際だった存在感を放っていた。日本内地の女子中等教育機関の増設とともに女学生のシンボルとなった「海老茶袴」は植民地台湾にも伝来し、内地人女性の通う総督府高等女学校では1900年代初頭から着用され始めた。これに対し、もっぱら漢族女性が通う国語学校附属女学校では1914年から登校時の袴着用が規定されるが、当初は「何となく極りが悪い為めお互いに穿くのを遠慮」(60)して従来どおりの大衿衫(広い衿の上衣)に裙(スカート)を着用する生徒が多かったという(図4参照)。そうした移行期に「海老茶袴に束髪姿」の「熟蕃女」という差異の交差性が、波紋を大きくした。当時の人類学者たちが科学的に確立しようと努力していた「人種」の分類に従うとすればヤユツは「熟蕃」ではなく「生蕃」に区分けされうるが、観察者にとって「生蕃女」の女学生という想定はなかったものとも読める。

図4　国語学校附属女学校の生徒たち(1910年代初頭)
ヤユツ・ベリヤと同時期に技芸科で学んでいた生徒たち。膝下丈の大衿衫とゆったりした褲(ズボン)、革靴・布靴を着用している。写真の旧蔵者である楊罔(1896–1973、前列左から2人目)は、台南・大目降公学校で第5学年まで学んだ後、1910年技芸科入学、1913年3月卒業、故郷の母校に勤務(注106参照)。
出典:「柯天送文書」(個人蔵)。

ヤユツの回想記が映し出す台北は、「大へん広々として、見渡す限り青々とした木が茂つて

(59)「台北公学の近況」『台日』1911年10月5日。
(60)「本島女生の昨今　国語附属女学校」『台日』1914年12月4日付夕刊。

ゐて、其の間に綺麗な大きな家ばかり」[61]という表現が象徴する開放感と明るい希望に満ちた都市空間であると同時に、「外に出る時も、町へ出る時にも、皆私の顔を見て居ります」というような絶えざる視線のなかで「生蕃」としての自己認識が刻み込まれていく、いわば「人種化」の空間でもあった。ヤユツにとって一人前の女性の表徴であった顔面のイレズミは、セイバン、バンジンの標として経験し直される。学校とは、そうした作用がいっそう凝集された空間でもあった。「私の悪口を毎日々々言って「生蕃が何も分らないのに先生はあんなに親切にする」等とひどいことを云ふ人」や「驚く程のいたづらをして、平気な顔」の同学たちの記憶は、年月を経ても消えていない。ヤユツの学習能力について特別の疑念と興味をもって接したという教員たちの態度や[62]、出自による別学制度下での非正規生徒という処遇など、学校という場自体が漢族系生徒たちの排斥感情の培養土となった面もあるだろう。教員の「親切」という文言がヤユツの回想記に頻出するのは、そうした境遇と不可分であった。「一字を覚えると、飛立つやうに嬉しくてたまりませんでした」という学びの充実感と「一向かまはない、二三年過ぎたら、皆別々に別れてしまふのだ」と自らを励ましながらやり過ごす経験は、分かちがたく絡まり合っていた。

ヤユツの台北生活に関連して触れておきたいのは、淡水の長老教会淡水女学校の存在である。カナダ長老教会の宣教団によって台湾最初の新式女学校として1884年に開設された同校には、当初台湾東部宜蘭平原の先住民カヴァランの女性たちが多数を占めていた[63]。さらに1909年末には中部台湾の霧社パーラン社出身のラバイ・ボッヒとピダイ・ナバイが淡水女学校に入学している[64]。同校の生徒たちは、ローマ字やカナ文字、漢字の読み書き、算数、図画、衛生学などの学科とともに聖書、歌、オルガンなどを学び、エプロンやワンピースの制作・着用を体験するなど、教会学校の教師や伝道者の妻として期待される技量を身につけつつ欧米的文化要素と身近に接していた[65]。ナバイたちとヤユツの直接的な接点は確認できていないが、洋装で写真に収まるヤユツのファッションは、1920年代末以降に台湾都市部で流行するモードというより、同時代の在台宣教師社会で主流であったドレスを想起させるものがある。故郷を離れて台北で学ぶ先住民女性たちには複数の回路があり、新たに摂取する文化的資源は一元的ではなかったことに留意しておきたい。

(61) 本段落の引用はすべて、ヤジユツ・ベリヤ「蕃語教授と思出の数々」、438–439頁。

(62) 高橋精一「二十年前本島女子の美術趣味と描画能力」『満三十年記念誌』。

(63) Duncan MacLeod, *The Island Beautiful: The Story of Fifty Years in North Formosa*, Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church in Canada, 1923. 淡水女学堂は1884年に開学後、1904年から一時中断、1907年に4年制の淡水女学校として再開。同校の概略については、台北県私立淡江高級中学編『淡江中学校史』2000年。

(64) 総督府中学校舎監兼高等女学校教師イダー・シフトンの依頼を受けて、総督府蕃務本署が斡旋したという（台湾総督府警務局編『理蕃誌稿　第三編』1921年、51頁。「蕃女教育」『台日』1910年1月30日）。

(65) *The Acts and Proceedings of the Thirty-sixth General Assembly of the Presbyterian Church in Canada*, 1910, p. 104. *Ten Years in Formosa*, Women's Missionary Society of the Presbyterian Church in Canada, 1915.

今ひとつ、ヤユツの生活拠点とした艦艄が、日清戦後まもない時期より、娼楼に働く女性や行商人をはじめとして、沖縄・八重山諸島からの移民の集住した地域の一つでもあったことに触れておきたい[66]。19世紀後半以来の島外移住先での経験を通じて、成人女性の手甲に施されたイレズミ、さらにはイレズミを施した女性の存在自体を否定し隠すべき対象とみなす圧力が強まるなか、「生蕃」と同類視する眼差しは琉球人にとって恫喝の意味を有したが[67]、その圧力は台湾の植民者社会にあって一様ではなく、行商の女性たちと官吏の家族とで一様ではなかったとも示唆されている[68]。ヤユツの回想記中の登場人物は学校関係者に集中しているが、台北という島都での生活を通じて、差異と類似を見つけ出して人間を比較し分類し秩序化する帝国の人種化の力学に巻き込まれる面もあっただろう。そうした日常場面に置き直すならば、ヤユツの海老茶袴は、日本への同一化の標しというよりは、女学校生徒であることの鮮明な自己表現であったろうと思わされる。女学校就学者が希少な社会にあって、その装いが放つ差異化の威力は、帝国の中心部よりも周縁とされる場や関係性においてむしろ高まったはずだ。この点は後に改めて論ずるとして、以下では、ヤユツが修学後の未来像をどのように思い描いていたのか、その痕跡を確かめていこう。

図5　ヤユツ・ベリヤ肖像写真（1910年代初頭）

女学生のシンボルたる袴と庇髪でスタジオセットに収まる。中野忠蔵の本家筋にあたる中野家に保管されていた一枚。

出典：中野卓「蕃社のヤジュツベリヤ：『商家同族団の研究』余話（二）」『未来』178、1981年。

2.2　京都移住の願望とそのゆくえ

ヤユツが女学校に入学してまもなく、忠蔵が単身で京都へ帰郷した。忠蔵が肺病を患っていたことや[69]、実家で静養しながらヤユツの「〔女学校〕終業を待つて居られる」[70]との消息も伝えられ、京都の中野家には写真館で撮影された袴姿のヤユツの写真も残されている（図5）。だが、結婚や家事を理由として退学して

(66) 又吉盛清『大日本帝国植民地下の琉球沖縄と台湾』同時代社、2018年、第三章。

(67) 日清戦争後に沖縄人が直面した「何者か？」「お国は？」という問いかけの意味作用を考察したものとして、冨山一郎『暴力の予感：伊波普猷における危機の問題』岩波書店、2002年。

(68) 又吉盛清『大日本帝国植民地下の琉球沖縄と台湾』73頁。ただし、同書では典拠の明示がなく、時期も定かではない。1940年代の経験については、山本芳美『イレズミの世界』（河出書房新社、2005年）や松田ヒロ子『沖縄の植民地的近代：台湾へ渡った人びとの帝国主義的キャリア』（世界思想社、2021年）等に聞き取りの記録がある。

(69)「蕃人の恋」『台日』1915年3月10日。

(70)「奇しき縁（四）　中野氏渡台譚」『日出』1912年5月3日。

いく生徒が少なくないなか[71]、ヤユツが一人で台北に残り女学校へ通い続けたことはやや異例とも見える。この決断の意味合いは、これまで当然視されてきた学業の完成という単線ではなく、数度にわたる京都訪問のプロセスと重ねることによって、新たに捉え直すことが可能だろう。

ヤユツの内地渡航について、ジオメクの研究は総督府主催の「内地観光」に関心を集中してきたが、ここでは官製イベントをなぞるのではなく、ヤユツが単独で敢行した内地渡航にスポットライトをあてる。以下、忠蔵の帰郷から逝去までの4年間に確認しえた台北・京都間の往来について、その概略を摘記する[72]。

(1) 1912年4–5月、ヤユツは総督府主催「内地観光」[73]に通訳として同行し、約1年ぶりに忠蔵との再会が実現する。観光団の様子は連日各地のメディアを賑わせ、多額の国費を投入した「討蕃事業」の「成果」を内地へ披露する役割をも果たす。一行のうち唯一の女性であったヤユツの経歴、とりわけ忠蔵との「恋物語」は種々に色づけされて報じられ、京都では観光団の来京にあわせて「探検実話　生蕃少女の恋」[74]の上演にも及んでいる。そうした衆目環視のなか、忠蔵は神戸へ入港する一団を出迎えたほか、京都滞在中に姉ミツらを伴い旅館を訪れて束の間の面会の時をもった。出発前には「無事に帰へり行くやうと盃を取交し」[75]、停車場まで見送っている。

(2) 1913年4月、女学校「卒業」を機として「意を決して愈京都に呼び寄せること〻なり」渡航準備を進めていたところ、総督府によって差し止められた[76]。内地の新聞記事によると、総督府内部で「生蕃の内地移住は未だ曾てあらざりし事」[77]、「山育ちは山に居るべきもの」など「堅苦しき法律詰」で問題化する動きが出たという[78]。これより以前に台湾先住

(71) たとえば、1914年度の中途退学者数は、1学年5（46）、2学年6（41）、3学年3（29）名で、いずれの学年でも在学者数の一割以上にあたる（括弧内は在学者数）。台湾総督府民政部学務部『台湾総督府学事第十三年報　大正三年度』（1917年）。

(72) 明らかな誤報や齟齬を含む新聞報道からヤユツの足跡を確かめることは容易ではないうえ、そもそも私的な渡航がマスメディアにさらされるという事態に留意が必要である。なお、中野卓（1920年生まれ）には、ヤユツの来訪を「〔母の〕着物の後の方につかまりながら、たもとの下辺りから、のぞき見した」という幼少期の鮮明な記憶があるという（中野卓「タイヤル族の叔母さん」、17頁）。この回想にしたがえば、ヤユツは1920年代半ば頃にも京都を訪れたことになるが、現時点では確認できていない。

(73) 総督府は、領台まもない1897年をはじめとして、「理蕃五箇年事業」の2、3年目にあたる1912、13年に相次いで4回、さらに1918年に1回、累計6回の官費による内地観光を実施した。先住民教化策の一環として論じられることが多いが、本国向けのイベントでもあり、参加者それぞれにも固有の文脈があった。

(74)「京都座の五月劇」『日出』1912年5月16日、「興行案内」『日出』1912年5月18日。

(75)「悲しき別れ　生蕃女学生の恋物語」『日出』1912年5月19日。元女学校教諭の回想には、この訪問中に「親戚会同の下に結婚披露の宴をして貰った」とあり、親族に引き合わせたことや別れの盃を交わしたことの意味づけには幅がある（大橋随鷗「数奇の運命に翻弄されし就学者のローマンス」、444頁）。

(76)「恋の生蕃少女　京都薬剤師と結婚式」『大毎』1913年4月19日。

(77)「蕃女のお輿入は延期」『大毎』1913年4月28日。

(78)「無粋なお役人様　ヤジユツペリヤ女史の泪」『東朝』1913年4月28日。

民の内地移住の例は見られるし[79]、民法・戸籍法はもとより戸口規則(1905年府令第93号)の適用対象外であった先住民の処遇をめぐり、移住を制限する法的根拠は乏しかったはずだが、総督府の認可なしに内地渡航は不可能であった[80]。

(3) 1913年7月、忠蔵危篤の報を受けたヤユツは、総督府の差し止めを振り切るかのように単身京都へ向かった。幸いにも持ち直したことで「滞在一ヶ月の予定」[81]へと舵を切った頃、ヤユツは忠蔵の傍らで「来年の春学校を卒業」し「卒業後は京都へ来て此家の主婦となる心算」だと記者に語ったという[82]。

(4) 1915年3月、京都移住が実現しないまま通学を続けていたヤユツは、寄宿舎で学校主事から忠蔵の訃報を受け取り[83]、衝撃のうちに翌4月単身で京都へ向かった[84]。ヤユツの乗った亜米利加丸が門司に寄港した折の新聞報道には、「余生あらんかぎり独身にて自活し亡夫を弔はんと健気にも語り居れり」[85]という同船事務長の言葉が見える。

以上のように頻繁ともいえる内地渡航の足跡は、ヤユツの行動力とともに、越境をめぐる閉塞状況をむしろ浮かび上がらせる。女学校退学から蕃語講習所講師へとつながる道筋は、京都で「此家の主婦となる」という期待が空しくなる過程と背中合わせであった。

ヤユツ・ベリヤの京都移住が実現しなかった経緯には、総督府の思惑とともに中野忠蔵やその親族の考量、ヤユツ自身の意志が絡み合っているだろう。この絡まりを考える一つの糸口として、ヤユツと重なりながらも異なる軌跡をたどったバイカイ・ワタンに目を向けておきたい。

バイカイ・ワタンは、1885年ごろ角板山社の頭目であった父ワタン・ナウイと母チュワス・ネーハンの間に生まれ、父の采配のもと、製脳労働者であった渡辺栄次郎と婚姻関係を結んだ[86]。1876年に大分に生まれた栄次郎は、後年の新聞記事等によれば、木挽(こびき)を生業とし、日清戦後まもなく大倉組に加わり渡台した後、大西組に転じて大嵙崁で樟脳生産に

(79)「生蕃少女の内地行」『台日』1899年8月26日など。

(80) 台湾総督府の渡航管理政策については、王学新「日治時期台湾出入境管理制度與渡航両岸問題」(『台湾文献』62:3、2011年)、巫靚「日本統治期の台湾における渡航制度の形成:1897年5月8日前後をめぐって」(『人間・環境学』27、2018年)。ただし、台湾総督府の渡航政策や「内台共婚」制度がもっぱら漢族系の台湾住民を対象として形成されてきた経緯を投影して、既往の研究では先住民の処遇について検討の対象外となっている。

(81)「蕃女ヤジツ渡来(下関)」『日出』1913年7月13日。

(82)「ベリアの女房振　此所の主婦になります」『大毎』1913年7月15日。

(83)「蕃人の恋(一)逢はざる別れ」『台日』1915年3月10日。

(84) 帰台の時期は確認できていないが、元女学校教諭の回想によれば、この時の京都滞在は4–6月だという(大橋随鷗「数奇の運命に翻弄されし就学者のローマンス」、444頁)。

(85)「蕃女の悲哀」『福日』1915年4月20日。

(86)「渡辺栄次郎普通恩給証書下賜」(『大正十四年総督府公文類纂』第二巻、V3866/A 25)、「内地人対本島人又ハ蕃人ノ縁事関係並ニ本島人対内地人ノ縁事関係調査表」(『大正八年総督府公文類纂』第一巻、V 6665/A13)等。

従事していた人物だ[87]。バイカイの父ワタン・ナウイは、栄次郎を「キニヤタン」（養子）として共同体に迎え入れ、一人前のタイヤル男性として規範や力量を身につけるよう期待したようである。1900年に大嵙崁での武力衝突が激化した時期、種々の情報が飛び交うなかで「蕃人ノ養子トナリタル内地人二人アリ今回蕃人ヲ指揮攻撃シタリトノ説アリ」[88]との報告も見える。10年近く角板山タイヤルの一員として暮らした後、桃園庁の説得に応じて「〔明治〕三十九年山を出て久しぶりに日本人に逢ふた」[89]とも伝えられる。桃園庁雇として武力衝突の前線に身を置いたのを皮切りに、タイヤルの言語や慣習に通じた通訳として総督府から重用され、臨時台湾旧慣調査会雇のほか、警部として新竹、花蓮港、南投、台中など先住民制圧戦争の最前線へと転配属を重ねた。その間、バイカイと子らは台北の八甲街に居を構えており、相前後して故郷を離れたヤユツとごく近所で生活していたことになる。

ヤユツの最初の内地渡航からほどない1912年10月、バイカイは夫と二人の子どもとともに内地へ渡った[90]。目的地は夫の郷里である。前年に引き続き総督府主催「内地観光」に通訳として同行した栄次郎は、家族を伴って本籍地・大分に足を伸ばし、渡辺梅海（バイカイ・ワタン）の入籍および子らの認知の手続きを行ったうえで、妻子を郷里に残して単身で台湾へ戻った。ちょうど長女が学齢を迎える時期にあたり、小学校就学の要となる就籍の手続きとともに、子らの生育環境として内地を選んだのであろうか。栄次郎が「理蕃五箇年事業」完遂まで先住民制圧戦の前線を離れ難かったという事情も考えうる。バイカイらは「茲（ここ）両三年間」[91]で台湾に戻る心積もりとの報道も見られるが、結果として、栄次郎が総督府警部を免官となるまでの10年以上にわたり、梅海（バイカイ）は夫不在の異郷で子育てに専念することとなる。

先住民女性と内地人男性の親密関係に対する帝国メディアの注目や「容貌より言葉まで内地婦人と見紛ふばかりなり」[92]といったバイカイに向けられた「讃辞」は、ヤユツの場合と重なるようではある。だが、両者が「日本人の妻」としてそれぞれの念慮と決断をもって引き受けたものには、おのずと相異なる面もあった。内地移住に先立ち顔面のイレズミの除去手術を施していたというバイカイの前にあったのは、地方庁雇から総督府通訳へと活躍の場を拡げる夫を支え、学齢期を迎える子らを夫の生家で「日本人」として育てるという責

(87)「如何にして生蕃少女と恋に落ちしか」『大毎』1912年10月9日、「九年の蕃地生活／生蕃を妻にした十七年ぶりの帰朝者」『大朝』1912年10月9日。

(88)「大嵙崁方面生蕃小松脳組事務所ニ襲撃其他兇暴事件及膺懲ノ為行軍状況並膺懲後ノ蕃情詳報」『明治三十三年総督府公文類纂』第八巻、V532/A14。

(89) 森丙牛「誰か言ふ蕃人に涙なしと／数々の奇しき恋物語」『台日』1925年6月21日。

(90)「生蕃団来る　笠戸丸船中の奇抜なる観察　生蕃娘と結婚せる討伐隊員」『読売』1912年10月5日、「蕃社に入婿　生蕃観光団来る」『大毎』1912年10月6日ほか。

(91)「蕃婦の恋物語（一）　十余年間の蕃界生活」『福日』1912年10月9日。

(92)「生蕃恋物語　観光団中の一異彩」『東日』1912年10月9日。

務であった。福岡の旅館にバイカイ一家を訪ねて「刺墨の跡だに無かつた」[93]と顔面の痕跡を探る記者の視線は、同一化への圧力と差異化への固執が形を変えて継続する予兆でもあった。一方、最初の京都訪問を前にして寄港地門司で取材陣に囲まれたヤユツは、「こんな醜い風」の自分が「お訪ねしてお親類の方なぞに会ひでもしますと良人の恥」[94]だと語ったという。自らが身に受けてきた好奇の眼や侮蔑、誹謗の鋒が身近な人々にも及びかねないという懼れと痛みを抱えつつ、ヤユツとバイカイはそれぞれの場で関係性を紡ぎ継いでいく。

30歳若干で「寡婦」となったヤユツは、約15年にわたる都会生活を離れ、故郷からやや離れた山郷にて単身で俸給生活を始める。10代半ばに離れた故郷との新たな関係の結び直しへ向かう一方で、再び総督府観光団の通訳として京都を訪れた折には忠蔵の父・忠兵衛とともに中野家の墓に参り[95]、さらに後年に単身で忠蔵の親戚宅を訪問して「ヤジュッツァンやないか」[96]と迎えられるなど、不安の種であった中野家との交際を忠蔵没後も途切らせていない。俸給の中から故郷の親族や京都の義父母に仕送りを続けたともいう[97]。京都移住に傾けた思いは、屈折を経て、蕃語講習所講師として自活する日々とつながっていた。

3　山郷での自活

3.1　「臨時蕃語講習所」講師の位相

ヤユツが京都へ弔いに向かった約3ヶ月後の1915年7月10日、新竹庁管内に蕃語講習所の建設認可を求める庁長名の稟申書が総督宛に提出された[98]。「蕃語ニ精通シタル多数警察職員ノ養成」に向けて宿舎、食堂、炊事場、浴室等を附設した講習所建物を設計したもので、「蕃務本署ヤジツベリヤヲ講師ニ採用」するとの見込みも示されていた。折しも「理蕃五箇年事業」終了を受けて蕃務本署の廃止は2週間後に迫り、ヤユツは解職となるタイミングであった。この稟申は経費増額の措置とともに7月16日付で迅速に認められ、島内2

(93)「蕃婦の恋物語(一)」『福日』。1920年代には主に薬品(塩酸か)により皮膚を焼き取る手法が用いられ、後に皮膚の剥離・移植の手法が導入されたという(山本芳美『イレズミの世界』246頁)。なお、山本の整理によれば、台湾で最初のイレズミ除去手術は1917年新竹庁管内のサイシャット男性とされ、男性が先行した理由として施術部位が女性よりも限定的であったことや「出世の早道」としての意義が指摘されている。ジェンダーや官職との連関は重要な観点だが、管見の限り、1912年以前に台北の病院で除去施術した複数のケースを示す同時代の記録があり、再検討の余地はあると思われる。また、イレズミの除去が「出世の早道」を開いたというより、警察吏員となった者の中から率先してイレズミ除去を決断する者があったと捉えるほうが妥当ではないだろうか。

(94)「珍客生蕃来る　異彩揃の観光団」『福日』1912年4月27日。

(95)「生蕃婦人のお念仏」『中外』1918年5月14日。

(96) 中野卓の幼少期の記憶のなかの母万亀子の応対(「タイヤル族の叔母さん」、17頁)。

(97) 井上伊之助『生蕃記』(警醒社書店、1926年、146頁)が触れるのは京都の義父母への仕送りのみであり、これに対して李は、故郷の親族に対しても同様の配慮があったことを強調する(李慧慧「一個完美女性教育家的形構」、64頁)。

(98)「蕃語講習所附属建物建設認可(新竹庁)」『大正四年総督府公文類纂』第四巻、V5897/A42。

つ目の臨時蕃語講習所が2ヶ月足らずのうちに開所する。同年9月、ヤユツは新竹庁雇の身分を得て、同講習所唯一の講師として内横屏山に赴いた。内横屏山で約10年の実践を重ねた後、1926年初頭に講習所移転とともに同じ管内のシパジー社へ移り(99)、1932年3月に同地で病没するまで警察職員のタイヤル語教育を担うこととなる。

バークレーの議論が示唆するように、総督府の側において、ヤユツの存在は、彼女自身の経歴および蕃語講習所講師という役割において、清朝期から連続する通訳者――越境的な婚姻・養子関係を通じて経済的・軍事的な互恵関係の結び目となってきた「通事」や「番婦」――の活用を打ち切り、官設の教育施設による通訳の養成へと切り替えていく転回点に位置したと捉えうる(100)。

それでは、タイヤル社会の変容過程において、ヤユツの存在や経験はどのような位相にあったといえるだろうか。日本人と離別した若輩の女性であるヤユツが単身でタイヤル社会を生きるなかで、学校経験や台北・京都での生活経験はどのように捉え返されていったのか。また、そうしたヤユツの存在は、タイヤル社会および帝国における権力ヒエラルキーやジェンダー秩序にどのように揺らぎや軋轢を生み出す動力となったのか。

李やジオメクは、管内警察職員の俸給や講習所記念写真の座席位置などに着目し、ヤユツが獲得した社会的地位の高さ、とりわけ内地人警察職員＝男性たちに「先生」と呼ばれる立場にあったことを強調し、内地人からもタイヤルからも尊敬を集める特異な存在として両者を媒介する役割を担ったと論ずる(101)。帝国／「人種」／ジェンダーの秩序を揺さぶるようなヤユツ像はたしかに魅力的であり、こうしたイメージを提示する積極的な意義は小さくないと考える。だが、なぜヤユツだけが突出した存在に見えるのか、その構造を不問にしたままヤユツ個人の稀有な達成として光を当てることは、むしろ歴史的制約のもとでヤユツや同時代の女性たちが経験した葛藤と充足感、断念と決断の交錯を見えづらくしてしまうのではないだろうか。

ヤユツたちの足跡を歴史的文脈において理解していくために、残された断片的な資料について、なお踏み込んだ検討の余地がある。筆者自身もいまだ検証の及ばない点が多いものの、これまで利用されてこなかった資料にも光を当てながら、ヤユツの働きや周囲の人々との関係について検討を加えたい。

図6・7は、内横屏山臨時蕃語講習所開所記念(1915年9月)およびシパジー移転後の臨時講習記念写真(1930年頃か)である(102)。それぞれ中央の所長と思しき人物の脇に和装や洋

(99) 新竹州『新竹州要覧』(1923年)によれば、内横屏山は、新竹市街からは軽便鉄道8里と轎1里余りを乗り継いで往復できる「蕃界視察には最も便な勝区」(254頁)という位置づけにあった。シパジーへの移転も、統治上の効率を高めることが理由の一つであったようだ(「講習所遷徒」『台日』1926年3月10日)。

(100) 保羅・D・巴克莱『帝国棄民』308–311頁。

(101) 李慧慧「一個完美女性教育家的形構」、Kirsten L. Ziomek, *Lost Histories*.

(102) 図7はヤユツの養子のアルバムに収められた一枚(個人蔵)。

図6　新竹庁内横屏臨時蕃語講習所開所記念（1915年）
中央に所長（樹杞林支庁長）と思しき警部、その左に袴姿のヤユツ・ベリヤ。周りは第1回講習生として選ばれた管内の巡査および巡査部長。
出典：『台湾愛国婦人』84、1915年11月（函館市中央図書館所蔵）。

図7　新竹州シパジー臨時蕃語講習所の記念撮影（1930年頃か）
中央に新竹州竹南郡警察課長と思しき警部、その右に洋装のヤユツ・ベリヤ。周りは講習生の警察官。
出典：Kirsten L. Ziomek, *Lost Histories*.

装に身を包んだヤユツの姿を見出すことができる。

講習所では、新竹州の采配のもと管内から選抜された10数名の巡査を迎え、4ヶ月程度の集中講習の後に卒業試験を経て送り出す。シパジーへの移転までの約10年間に累計16回開催され、ヤユツの講義を受けた講習生は延べ239名に及んだ(103)。この間、講習体制は改編を重ね、開所まもなく警察職員が教官として増配されたほか、語学以外の講習科目も盛り込まれた。たとえば、1929年には、石田貞助警部を筆頭に計3名が教官として配置され、講習科目は語学（毎週24時間）のほか訓育（2）、法制（2）、農業（2）、点検操練（1）、武術（4）、科外（随時）から構成されている(104)。李やジオメクらが瞠目するように20円（1916年）から62円（1926年）へと昇給を重ねた処遇は破格に見えるが(105)、同時期に附属女学校を卒業し公学校教員となった者たちと比するならば突出しているともいえず、むしろ州雇のままの講師処遇が目を引く(106)。教官たちの異動が頻繁ななか、唯一講師として勤続し同講習所の看板役を担ってきたのはヤユツであった。

ヤユツの担った職務は、不定期の講習会のみではなかった。図8は、所長として節目ごとに講習所を訪れた中田秀造(107)の遺族が旧蔵していたアルバムの一枚であり、講習所と

(103)「新竹州蕃語講習会」『台湾警察協会雑誌』104、1926年2月。

(104)「臨時蕃語講習所開始」『台湾警察協会雑誌』145、1929年7月。講師としてヤユツ・ベリヤの名前は見当たらず、退職の可能性等の検証は今後の課題である。

(105) 台湾総督府『職員録』各年度。

(106) たとえば、ヤユツとほぼ同時期に附属女学校技芸科に入学した楊罔（図6参照）の場合、3箇年課程修了後に故郷の公学校に雇として就職し、一時中断を挟んで臨時講習会等により正教員資格を取得、30代半ばの辞職当時の月俸は56円であった（北村嘉恵「試探台南新化楊罔之生命歴程：20世紀前期台湾女性的就学與教育経歴」『歴史台湾』17、2019年）。

(107) 樹杞林支庁長在職期間は、1911年3月–1917年8月。

図8　新竹庁管内タイヤルと官吏の巡視（1910年代）

右手に官警、左手に壮年のタイヤルが座り、その間に酒壺が置かれている。右端の制服姿の男性の影に和装のヤユツの庇髪や白足袋が見える。

出典：「中田秀造文書」5NHP-0003-58（台湾・中央研究院台湾史研究所档案館所蔵）。

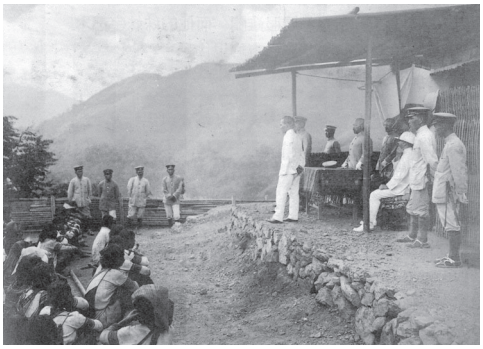


図9　新竹庁管内ガオガン群タイヤルの「帰順式」（1926年）

右手の高台に官警、左手に壮年のタイヤルが座り、側方に警官が立つ。官警の最前面に立つ制服姿の男性は公医日野三郎（ロシン・ワタン）。

出典：『桃園老照片故事2　泰雅先知　楽信・瓦旦』桃園県文化局、2006年。

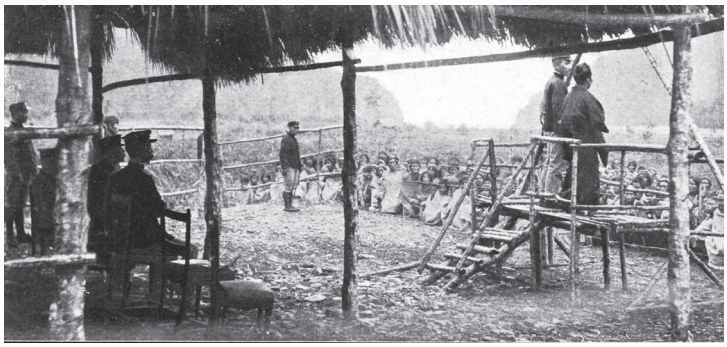


図10　宜蘭庁管内南澳群タイヤルの「帰順式」（1912年）

左手前に官警、向かい合ってタイヤルの老若男女が座る。両者間は鉄線で仕切られ、警戒態勢の警吏が目を配る。壇上で通訳にあたる和装の女性は宜蘭庁嘱託宮崎イワか。

出典：成田武司編『台湾生蕃種族写真帖』成田写真製版所、1912年。

おぼしき建物の前庭に集まったタイヤル成年男性を前に官吏が訓示を行っている場景である。制帽を脱いで机を前に立つ官吏と聴衆との間には数本の酒瓶が見える。右端の警察職員の影に隠れるように写り込んでいるのが、ヤユツである。通訳をするには中央の話し手から距離があるが、男性ばかりの公的な場で臨機応変に通訳を担うことはヤユツにとって日常であったろう。こうしたヤユツの立ち位置を考える手がかりとして、同時期に台湾北部のタイヤル集落で行われた「帰順式」の場景を並べてみよう。

図9の地点は内横屏山東方の山間部の広域警備拠点たるガオガン警察監督所であり、一段高くしつらえた台地に居並ぶ軍警と、座列するタイヤルとが向き合っている。高台の先端に立ちタイヤルに向かって話しかけている制服姿の人物は、台北医学専門学校卒後に公医として同地に配置されていた日野三郎（ロシン・ワタン）である[108]。一方、図10の地点

(108) 日野三郎（ロシン・ワタン）が担った通訳としての立ち位置については、別稿で考察を加えた（北村嘉恵「台湾先住民族の歴史経験と植民地戦争：ロシン・ワタンにおける『待機』」『思想』1119、2017年）。

は台湾東部の南澳であり、木製の壇上に制服姿の叭哩沙支庁長と着物姿の通訳が立ち、その前下方にタイヤルが座列し、両者の間は鉄線で隔てられている。宜蘭庁嘱託宮崎イワと思しきこの女性は、「日本の母」として同地タイヤルの「尊崇」を得たと伝えられる(109)。この3枚を並べたとき目につくのは、「討伐」の前線たる「帰順式」の場とヤユツの持ち場の緊迫感の落差だ。総督府側がタイヤルとの間に配した鉄線、段差、酒瓶といった小道具は、両者の関係性の可変性とともに、敵と味方を分かつ鉄条網と和議を示す酒瓶とが地続きにあることをも想起させる。

図11　ヤユツ・ベリヤと女性たち(1920年代後半か)
祝祭日に和装で集う女性たちのなかで、ヤユツ(前列左から5人目)のみ袴を着用。中央に駐在所長の妻と思しき女性、右手に子連れのタイヤル女性たち。
出典:「中田秀造文書」5NHP-0003-71(台湾・中央研究院台湾史研究所档案館所蔵)。

写真によって装いも雰囲気も異なるヤユツの姿からは、多面的といった概括には収まらない、10代半ばから人目の中で生きてきたヤユツの機知とも意志ともいいうるものが垣間見えるように思う。その一片が、晩年まで和装の際には袴を着用し続けたらしいことだ。その意味合いを考える契機となったのが図11である。場所や時期は未確定だが、ある国家祝祭日の記念写真であり、女性たちのなかにいるヤユツを映し出す珍しい一枚だ(110)。晴れの日の場景を手がかりに掘り下げるべき課題は多いが、ここでは唯一袴を着けているヤユツの姿に目を留めたい。中央の椅子を占めるのは駐在所長(ないし所員)の妻と思しき人物であり、その傍らでヤユツの着こなしと風格は際立っている。ヤユツにとって女学校経験と不可分の袴スタイルは、日本人一般ではなく女性教師のシンボルであり、自らの経験に根差した矜持の顕れであるように見える。と同時に、教育制度の整備に伴い、蕃童教育所卒業者には女学校進学資格がないという構造が明確になるなか、後進の女性たちにとってヤユツの袴姿は両義的な意味合いを帯びて映ったのではないかとも考える。ヤユツの活躍の傍らで、学校という回路が開きうる可能性と自らの出自ゆえに立ちはだかる壁の分厚さとを感知する少女たちがいたはずだ。ヤユツが希有な存

(109) 成田武司編『台湾生蕃種族写真帖』(成田写真製版所、1912年)。バークレーやジオメクは、この女性をヤユツだと推定しているが、本稿では、袴なしの和装であることや、宮崎イワについて「ヤヤ(母)の云ふことには嘘がない」と慕うタイヤルがあったと伝える報道(「謝恩観光の蕃人(下)」『台日』1909年6月11日)などから考量した。

(110) 現時点では1920年代後半と推定されるが、時期と場所の確定は今後の課題である。

在であったのは、ヤユツの努力ゆえというだけでなく、その達成がヤユツ個人に止まらざるをえなかったような構造と不可分である。

3.2　タイヤル語の調査研究と次世代

ヤユツの経歴をたどるなかで浮かび上がるのは、周囲の期待を引き受けつつ周囲の人々を引き込みながら自らの力量を発揮する場を切り拓いてきた痕跡だ。それだけに、総督府の女子教育の第一線で学び、多方面で実地経験を積み技量を磨きながらも、学歴を資本とした社会上昇という観点からすれば、非主流のなかの特別待遇という枠に押し止められていたという印象を否めない。ヤユツ自身は自らの生を生きたにしても、そうした境遇には、彼女に続く先住民エリートたちがまず直面し、学歴の社会的機能が高まるにつれて、より広範な先住民男女が遭遇することとなる。新たな可能性と制約とが交錯するなかで、ヤユツたちは学校教育を通じて身につけた力量をどのように発揮していったのか。ここでは、ヤユツの多面的な活動のなかからタイヤル語の調査研究に限定して検討しておきたい。

表3は、20世紀前半に刊行されたタイヤル語彙集の概略である。未刊行の文書や雑誌掲載の諸稿等は含めていないほか(111)、言語に特化されていない書籍も含むなど、タイヤル

表3　20世紀前半に刊行されたタイヤル語彙集類

書名	著作権者	出版者	発行年	調査・翻訳・執筆・編修に従事した人々	類別
タイヤル蕃語集 台湾蕃語叢書第二巻	台湾総督府民政部警察本署	同左	1915	総督府嘱託丸井圭治郎作成の「蕃語集ノ原案（国語ノ部）」を総督府通訳兼警部渡辺栄次郎が翻訳	a
番族慣習調査報告書 第一巻	臨時台湾旧慣調査会	同左	1915	臨時台湾旧慣調査会補助委員小島由道が編修 総督府通訳兼警部渡辺栄次郎が調査協力 ヤユツ・ベリヤが起草時に助言	b
国語びき北蕃語辞典	台湾総督府	同左	1918	桃園庁警部補佐々木辰三郎が調査・編修	a
蕃族調査報告書 大么族 前篇・後篇	台湾総督府蕃族調査会	同左	1918・1920	蕃族調査会補助委員佐山融吉が編修 ヤジツ・ベリヤ、坂本三次郎、石田只市、熊倉松太郎、田中乙吉、早乙女由松、岩田甚蔵が通訳	b
台湾番族慣習研究	台湾総督府蕃族調査会	同左	1921	元臨時台湾旧慣調査会第一部部長岡松参太郎が編修 資料は『番族慣習調査報告書』に全面依拠	b
タイヤル語典	馬場藤兵衛	新竹州警察文庫	1931	新竹州巡査部長馬場藤兵衛（臨時蕃語講習所講師）がヤユツ・ベリヤと編修 タイヤル語協力：ヤユツ・ベリヤ、宇都木一郎、河野（宇都木）スミ、天井圭蔵、玉木波夫、イバン・タロー、馬場武 台北帝国大学教授小川尚義校閲	a
アタヤル語集	台湾総督府	同左	1931	台北帝国大学教授小川尚義が編修 ヤジツ・ベリヤが日本語の訳語を口述 新竹州巡査部長馬場藤兵衛（臨時蕃語講習所講師）が助力	c
原語による台湾高砂族伝説集	台北帝国大学言語学研究室	刀江書院	1935	台北帝国大学教授小川尚義、大阪外国語学校教授浅井恵倫が調査・編修	c
台湾高砂族系統所属の研究	台北帝国大学土俗人類学研究室	刀江書院	1935	台北帝国大学教授移川子之蔵、講師宮本延人、嘱託馬淵東一が調査・編修	c

(111) 日本による台湾植民地化まもない時期には地方行政庁や人類学者によって先住民言語の文献・実地調査が蓄積されたし、言語学者小川尚義の継続的な調査研究が蓄積されているほか、警察関係の雑誌には1930年頃から自学用の語学教材や現場からの事例報告などがしばしば掲載されている。表に掲げた著作は、そうした動向のなかで公刊されたものである。なお、19世紀末総督府による先住民語集編纂の動向を検討したものとして、三尾裕子「『蕃語編纂方針』から見た日本統治初期における台湾原住民語調査」（『日本台湾学

語の調査・研究の動向という観点からすれば難はあるが、ヤユツをはじめ調査研究に参与したタイヤルの存在に着目して、さしあたり書籍に限定したものである。

これらを編纂の経緯や編者の特徴から大まかに類別するならば、(a)先住民統治の現場にある警察官吏が職務の一環として調査し取り纏めたもの、(b)総督府のプロジェクトとして発足した調査会の委員が調査し取り纏めたもの、(c)言語学等の専門的訓練を経た研究者が調査し取り纏めたもの、の三群に分けることができる(表中の「類別」欄を参照)。これら三つの群すべてに関わったのがヤユツであり、その期間は20年以上に及ぶ。すなわち、女学校在学中には臨時台湾旧慣調査会、蕃族調査会など台湾総督府の基盤的なプロジェクトに加わり、臨時蕃語講習所赴任後には同僚たちの編集作業に参与したほか、帝国大学文科大学博言学科卒後に指導教官の薦めにより台湾総督府に就職した小川尚義の研究には台北在住中から亡くなる直前まで継続的に関わり続けた[112]。ヤユツが長年にわたる翻訳・通訳の作業を通じていかなる工夫や努力を重ねたのか、ここで各語彙集の内容に踏み込んで検討する余裕はないけれども、治安の確立・維持、法制整備、学術研究の各方面にわたり鍵となる役割を担ったことは確かめられよう。また、地域により異同のあるタイヤル語彙のなかから、ヤユツを媒介として「タイヤル語」「アタイヤ語」の体系化が進行したともいえる[113]。

ヤユツが長期にわたり第一線に立つ一方、1930年代の出版物では、ヤユツより若い世代のタイヤル青年たちの参与が明示されるようになる。『タイヤル語典』(1931年)の協力者として名を記された宇都木一郎(ハジュン・ウスン、1890年生まれ)、河野スミ(ヤゴ・ウスン、1905年生まれ)、天井圭蔵(カライ・マライ、1903年頃生まれ)、玉木波夫(ロシン・ホラ、1910年代生まれ)は、いずれも角板山蕃童教育所を経て、それぞれ医学専門学校、日本赤十字社台北支部特志看護婦講習所、私立仏教中学林、嘉義農林学校に学んだ若きエリートたちである。ヤユツの場合と異なり、蕃童教育所在学中に当局に抜擢されて官費で小学校や上級学校へ進学し、成業後は当局の意向に沿って故郷で公職に就くというコースをたどっている。幼年時から故郷を離れ、小学校転入時に日本名を付与された点でも、ヤユツとは異なる新たな世代だ。同書刊行時には、宇都木一郎が新竹州公医としてすでに10

会報』11、2009年)、その一部である未刊原稿を翻刻したものとして、落合いずみ『十九世紀末のセデック語資料『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』:百余年後の言語学的考察』(北海道大学アイヌ・先住民研究センター、2020年)がある。

(112) 馬淵東一の回想によれば、「〔ヤユツ・ベリヤは〕大正3・4年頃から先生のお宅にしばしば出入し、昭和5・6年頃病死するまで御家族とも親戚同様の交際をつづけてゐた」という(馬淵東一「追悼　小川尚義教授」『民族学研究』12:2、1948年)。

(113)『タイヤル蕃語集』(1915年)では、使用者が自分の勤務地の語彙を書き込む欄が用意されている。また現在の台湾では、学校教育でも先住民族言語試験でも地域ごとの違いが重視され、タイヤル語だけでも複数種の教材や試験問題が作成されている。

図12　シパジー臨時蕃語講習所の所員と州知事の巡視（1932年）
ヤユツ・ベリヤ没後まもない時期の講習所。前列中ほどの女性は、ヤユツの後任となった河野スミ（ヤゴ・ウスン）ないし教育所卒業生か。中央の椅子に巡視中の州知事、その両脇に随行者の州警務課長・理蕃課長が立つ。
出典：『新竹州知事内海忠司閣下大渓竹東両郡下初巡視紀念写真帳』1932年（個人蔵）。

年ほど経験を積み、他の男性たちはそれぞれ警察吏員として勤務中であり、一郎の妹スミは結婚を機に大渓郡雇を辞して夫（大分出身、巡査）の任地・竹東郡に移った時期にあたる（図12）。上級学校への進学や都市部での就職を断念して出身地へ戻った若者たちがいるなか(114)、調査への関与は、協力・援助という形ではあれ、学校で学んだ技量を発揮する一つの機会であったろう。調査者たちの充実した調査研究は、ヤユツたちが蓄えてきた力量の発露でもある(115)。

その中で、自分たちの言葉をめぐり揺れる心情が垣間見える記録がある。以下は、12歳から生地を離れて約12年間にわたり内地人向けの学校で学んだ日野三郎（ロシン・ワタン）との会話を、小川尚義が述懐したものである(116)。

> 角板山の日野君（高砂族出身の公医）が曾て、ヤジツさんの蕃語は大変変つてゐる、本当の蕃語ではありませんよといつた、その時君のはどうですといつたら、私のも少しは怪のがあるかも知れません、実は自分でもよく判りませんがといつた

ヤユツをめぐる記録の断片からは、相手の期待を汲み取って絶妙に応対する姿がほの見える一方で、自らの言葉について深刻な問いがエリート青年たちを捉えていたことも看過できない。「本当の蕃語」をめぐる自問と「正確な材料」(117)を求める営為の間には、突き詰

(114) 蕃童教育所の広がりと上級学校進学機会の限定性という構造的な閉塞状況に直面した先住民青少年たちの存在については、北村嘉恵『日本植民地下の台湾先住民教育史』（北海道大学出版会、2008年）。

(115) たとえば小川尚義は、「一夏内横屏山に居りますヤジツ氏に就いて、色々研究しました。幸に先方は日本語が自由に出来ますので、調査が案外捗取りました」（「台湾の蕃語に就て」『台湾時報』49、1923年、15頁）と満足の意を表し、馬場藤兵衛は「編纂資料蒐集の期間大渓郡ガオガン分室へ転勤を願ひ同地に於て七箇月間宇都木公医兄妹と親しく語法の研究に没頭し編纂の基本資料を得て」「帰来後は専らヤユツベリヤ氏と編纂に従事」したと成り立ちを記している（『タイヤル語典』新竹州警察文庫、1931年）。

(116) 小川尚義「タロコの伝説」（台湾総督府博物館編『創立三十年記念論文集』1939年）、165頁。

(117) 小川尚義「台湾の蕃語に就て」15頁。「生蕃の言葉は生蕃自身が日本語を覚えなければ、本当の言葉の内

めるならば相容れない局面が浮かび上がるだろう。自分たちの言葉や来歴をめぐる青年たちの問いは、「正確さ」をめぐる問いと重なりながら次世代へと引き継がれていく。

むすびにかえて

本稿がヤユツに付与された「先覚者」あるいは「媒介者」「境界者」といった範疇をいったん離れて、ヤユツの生きた空間や関係性を具体的に掘り起こすことを通じて浮かび上がらせようとしてきたのは、ある差異が意味をもつようになる瞬間とその磁場である。台湾先住民諸集団が「日本」に遭遇し相渉る過程は一様ではなく、帝国による人種化の荒波のなかで個々の先住民男女が直面する葛藤の度合いや引き受ける道筋は一直線ではない。先住民女性のなかの傑出した存在としてヤユツを再生させるのではなく、ヤユツの個別性と、同世代の女性たちや後代の若者たちに通底する経験に目を向けることによって、ヤユツたちの生を横断した境界の複数性を示し、歴史的な制約のなかで可能であった選択肢の幅と偏りを跡づけることに意を用いた。その関係性の網目の中で、「日本人」「蕃人」の外延および内部に作用する差異もまたおのずと照らし出されてきたと言えよう。

ヤユツが出郷に踏み出すうえで忠蔵との出会いは契機とも足場とも理解されようが、ヤユツが台北生活や就学を継続する土台となったのは、日本人男性一般ではなく忠蔵と結んだ親密な関係であった。忠蔵が薬学校を卒業し薬剤師の免状を資本として流転を重ねていたことは、新領土に流れ込んだ植民者のなかでも特徴的であり、忠蔵が単身で帰郷した後に、ヤユツの京都訪問を拒まず、衆目環視のなか親族とも引き合わせたことは、ヤユツと中野家との関係継続の下地となっただろう。

一方、ヤユツの公学校就学・女学校進学が実現した鍵は、忠蔵や総督府の意向よりも日常生活のなかで醸成されたヤユツ自身の関心と行動力にあり、「人種」や年齢、性別、経済状況等により門戸を閉ざす植民地学校システムがいまだ形成過程にあった時代の所産でもあった。ヤユツと忠蔵の間に子がいなかったことが、ヤユツが台北で学校に通い続け、京都への移住を断念し、蕃語講習所講師として新竹の山郷へ向かうという人生の節々でもった意味合いも看過できない。日本人男性と関係をもった同世代の先住民女性たちと同様に、相手の行動や社会関係に強く規定されながら、その境遇を自らの生として引き受けていったのである。

新竹の臨時蕃語講習所への就職は、京都移住の希望が閉ざされた先に、総督府の先住民政策の新展開が重なる地点に実現したものであり、女学校教育の完成とその成果というよりは台北生活を続ける臨界点という意味合いが強い。ヤユツが学校教育を通じて身につけた漢字・仮名文字の読み書きの技量は、忠蔵をはじめ内地の知友らとの書簡による交わり

容関係は判らないと思ひます。通訳を介したり、手真似足真似では中々正確な材料は得られませぬ」と述べる小川において、言葉を収集し理解する主体は自分自身である。

を支え、また、学術調査研究に参画する扉を開いた。帝国の学知生成の最前線にあってヤユツや次世代のタイヤル青年らが調査研究の担い手と目されることはなかったが、語彙翻訳という基盤的な次元で近代言語学が目指したタイヤル語の体系化のプロセスに関与し、「本当の蕃語」をめぐる自問もそのなかで醸成されつつあった。

1932年3月に50歳を前に病没したヤユツの葬儀は、シパジー蕃童教育所を会場として講習生や教育所児童の参列のもと日蓮宗僧侶により執り行われた(118)。翌秋、竹頭角社のはずれに「ヤユツベリヤ之墓」と刻まれた墓碑が建立された。その背面には彼女の履歴が日本語で記されている。現在、竹藪に覆われた公共墓地の一角には、ヤユツが養子として引き受けた竹野勉(シラン・レイサ)の家族墓園が整えられ、ヤユツの墓石は、「聖経」(聖書)をかたどったモニュメントと並んでその一画に立っている。本稿の関心からすれば、ヤユツの出郷と還郷の意味合いをタイヤル社会の側から考えること、また、養子の小学校就学と内地留学を支えたヤユツの晩年と、内地での学びを経て台湾で技術者として生きた竹野勉(シラン・レイサ)の足跡をたどることは重要な課題だが、今後さらに慎重な検討を重ねたい。そこでは、タイヤル女性にとってのタイヤル社会の秩序と帝国の秩序の交差、越境結婚をした人びとの子どもたちが自らの存在のうちに引き受けることとなった複数の境界などが重要な主題となり、ヤユツ・ベリヤの墓碑を起点として再生成される伝説の現代的意味も問われることとなるだろう。

(附記)本稿は、教育史学会第60回大会(横浜:横浜国立大学、2016年10月)、成功大学台湾史国際学術シンポジウム(台南:国立成功大学、2019年5月)での報告をもとに大幅に改稿したものである。また、JSPS科研費JP19H01619の助成を受けた。記して謝意を表したい。

(118) 中野卓「蕃社のヤジュツベリヤ:『商家同族団の研究』余話(二)」『未来』178、1981年。